

# 若年教員の資質・能力を育成する組織運営の一考察

若年教員育成ロードマップ・評価表の活用を通して

糸島市立東風小学校  
教諭 後藤 太志

こんな手立てによって…

学年組織で若年教員育成ロードマップや評価表を活用した実践を行う。それをもとに、学校組織で取組の成果と課題を共有し、次の実践へとつなぐ。

こんな成果があった！

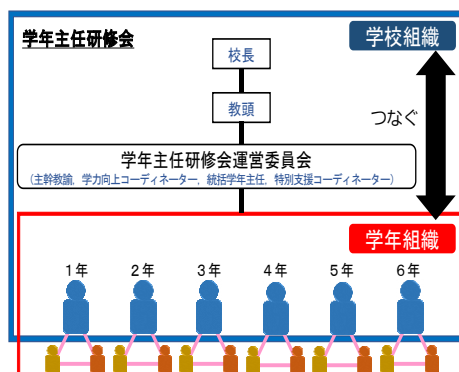
学年組織で学年メンタリングの実践をすることが、若年教員の資質・能力の向上につながった。

## 1 考えた

本研究に関わる本校の実態（課題）

本校の学力実態は上昇傾向にあるが、学年・学級間に差が見られる  
(若年教員の学級の平均点が低い傾向)

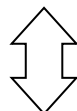
学年組織と学校組織がつながり、学校全体で若年教員を育成する体制づくりを構築する必要がある。



## 2 やって見た

### 学年組織の取組

若年教員育成ロードマップをもとに、若年教員育成評価表を活用しながら、計画的・継続的にPDCAサイクルを回して実践の積み上げを図った。



学年組織と学校組織で連携しながら若年教員を育成

### 学校組織の取組

若年教員育成評価表をもとに、各学年の学年メンタリングの実践を報告し合ったり、統括学年主任が発行する学年主任研修会通信で実践の紹介をしたりすることを通して、他学年の実践から学んだことを、次の実践へとつないだ。

## 3 成果があった！

若年教員育成ロードマップ・評価表を活用して学年メンタリングの実践を行い、学年主任研修会において、実践の成果と課題を明らかにし、次の実践へとつなぐサイクルを繰り返すことは、若年教員の資質・能力を育成する上で有効であることがわかった。

## <目次>

# 若年教員の資質・能力を育成する組織運営の一考察

## 若年教員育成ロードマップ・評価表の活用を通して

1	主題設定の理由	3
	(1) 現代社会の要請から	3
	(2) 本校の実態から	3
2	主題の意味	4
	(1) 若年教員とは	4
	(2) 若年教員の資質・能力を育成するとは	4
	(3) 若年教員の資質・能力を育成する組織運営とは	5
3	副主題の意味	7
	(1) 若年教員育成ロードマップとは	7
	(2) 若年教員育成評価表とは	8
	(3) 若年教員育成ロードマップ・評価表の活用とは	9
4	研究の目標	9
5	研究の仮説	9
6	研究の構想	10
	(1) 学年組織における取組	10
	(2) 学校組織における取組	11
	(3) 統括学年主任と学年主任の動き	11
	(4) 実践計画	11
7	研究の実際	12
	[第6学年の1学期の実践]	
	(1) Plan	12
	(2) Do	13
	(3) Check	15
	(4) Action	16
	[第6学年の2学期の実践]	
	(1) Plan	18
	(2) Do	19
	(3) Check	22
	(4) Action	22
8	全体考察	23
	(1) 若年教員育成評価表の変容から	23
	(2) 学年組織の取組の感想から	24
	(3) 学校組織の取組の感想から	25
9	成果と課題	25
	(1) 研究の成果	25
	(2) 研究の課題	25
	<参考文献>	25

## 若年教員の資質・能力を育成する組織運営の一考察

若年教員育成ロードマップ・評価表の活用を通して

糸島市立東風小学校  
教諭 後藤 太志

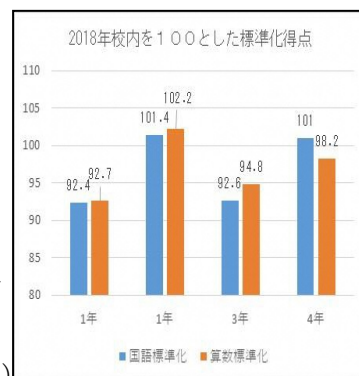
### 1 主題設定の理由

#### (1) 現代社会の要請から

文部科学省は「教員をめぐる現状」の中で、『今後、大量採用期の世代が退職期を迎えることから、量及び質の両面から、優れた教員を養成・確保することが極めて重要な課題となっている。』ことを指摘している。ベテラン教員が大量に退職し、経験の少ない教員が大量に誕生することは、教員の力量が、学校現場における多様な実践経験によって形成されることを考えると、学校の教育力が相対的に低下することを意味する。したがって、経験の少ない教員の力量の形成と向上を効果的・効率的に図ることが学校組織に求められると考える。

#### (2) 本校の実態から

本校の経営課題の1つに「学力実態は上昇傾向にあるが、学年・学級間に差が見られる（平成31年度学校経営要綱）」ことが挙げられる。標準学力テストの結果において、校内を100とした標準化得点で見ると、若年教員が所属する2つの学年（1年と3年）において、学年平均よりも大きく下回っていることがわかる（資料1）。校長は、前年度より「学年組織を原則、若年教員、中核教員、ベテラン教員で構成し、中核教員を学年主任（メンター）とし、若年教員（メンティ）を育てる体制を構築する。また、ベテラン教員（コンシリエ



【資料1 若年教員の標準化得点】

リ）には、学年主任の相談役として活躍してもらおうようにする。これにより、若年のみでなく、キャリアステージに応じた職能成長の場をつくっていく。」という方針を提示していた。そのことを踏まえて、学年主任として経営課題の改善に取り組むことができると考えたのが、「学年での目標管理を徹底する」についてである（資料2）

学年組織で行う学年研修会（毎週水・木に設定）と学校組織で行う学年主任研修会（毎月月末に設定）がつながり、学校全体で若年教員を育成する体制づくりを構築する必要があると考えた。

経営の重点
マネジメント・サイクルの徹底と計画的な人材育成
【方策1】「東風小学校学力向上戦略」に基づくPDCAの実行
①校内の基盤整備 ②実践的指導力の向上 ③学ぶ意欲と学びにおける自己肯定感の向上 ④学校・家庭・地域の連携 ⑤検証・改善の徹底
【方策2】学力向上を組織的に進める人材育成と目標管理の実行
①個々の教職員による「学力向上戦略」のPDCA管理 ②学力向上コーディネーターを中心とする、学力調査等の分析や方策提案 ③主題研究における「東風スタイル」の推進（アウトプット型言語活動の強化） ④「東風スタイル学習」の日常化に係る点検・評価・改善 ⑤学年での目標管理を徹底する。（コンシリエリの導入＋メンタリング）

【資料2 経営の重点】

## 2 主題の意味

### (1) 若年教員とは

本研究における若年教員とは、在籍校に赴任している教職経験年数5年までの通常学級担任をもった教職員のことである。

教職員	
経験10年未満：13名	本校で新任採用となった教員 8名 他校で勤務経験のない若年講師 2名
経験20年未満：9名	
経験30年未満：4名	
経験30年以上：7名 (内 再任用教員3名)	

※ 管理職を除く

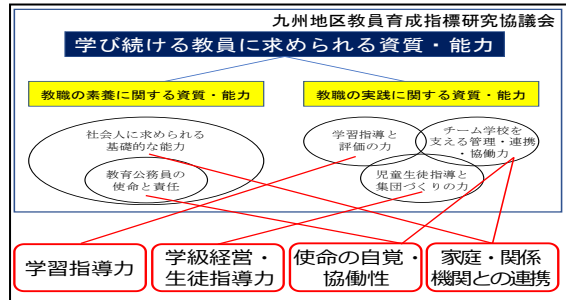
本年度の職員構成(資料3)の内、本年度の若年教員は、教職経験年数4年(2名)、教職経験年数2年(2名)、初任者(2名)、そして常勤講師(1名)の7名である。第1学年のみ4学級のため、若年教員が2名配置されている

【資料3 本校の職員構成】

### (2) 若年教員の資質・能力を育成するとは

若年教員の教職キャリアに応じて「学習指導力」、「学級経営・生徒指導力」、「使命の自覚・協働性」、「家庭・関係機関との連携」を向上させることである。

この若年教員の資質・能力については、九州地区教員育成指標研究協議会が教員育成指標として策定した2つの柱(学び続ける教員に求められる資質・能力の「教職としての素養」と「教職の実践」)を参考にして設定している(資料4)。



資質・能力を具体化すると以下の通りである。

【資料4 資質・能力の2つの柱】

資質・能力	内容	具体例
学習指導力	授業を構想する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>教材研究の進め方</li> <li>単元構想</li> <li>一単位時間の学習構想</li> </ul>
	授業を展開する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>東風スタイルの授業づくり(校内研究の日常化)</li> <li>発問の精選</li> <li>構造化された板書</li> </ul>
	授業を評価する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>ノート指導の仕方</li> <li>子どもの学びの見取り</li> <li>授業構想や展開の評価</li> </ul>
学級経営・生徒指導力	児童を理解する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>不登校やいじめ問題への対応</li> <li>教師と子どもの信頼関係づくり</li> </ul>
	児童を指導・支援する力	<ul style="list-style-type: none"> <li>学級・学年ルールの徹底</li> <li>子ども同士の人間関係づくり</li> </ul>
使命の自覚・協働性	ステージに応じた自己研鑽への意欲	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科担当制の導入</li> <li>教科等研究部会やサークル活動での活躍</li> </ul>
	同学年との協働 校務分掌組織での協働	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年研修会の短期PDCAサイクルの提案</li> <li>部会の担当分掌の働き</li> </ul>
家庭・関係機関との連携	保護者や地域との信頼関係づくり 外部機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>学級通信の配付</li> <li>アクション3の実施</li> <li>総合的な学習の時間の見直しや新たな単元づくり</li> </ul>

【資料5 若年教員に身に付けさせたい資質・能力】

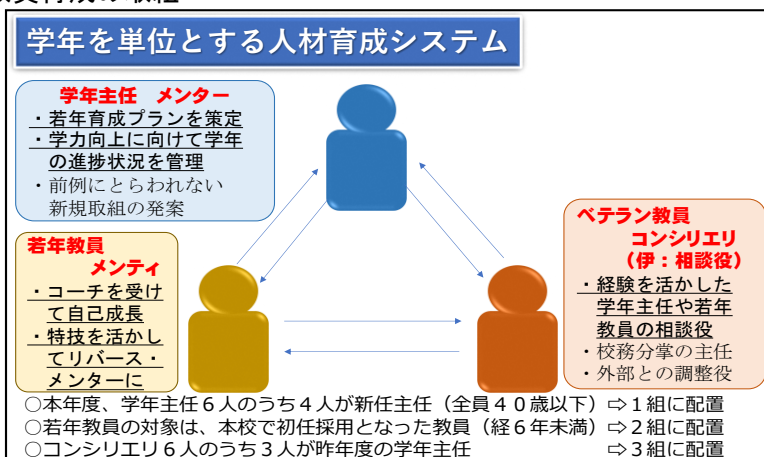
### (3) 若年教員の資質・能力を育成する組織運営とは

若年教員に身に付けさせたい資質・能力を明らかにし、学年組織でメンタリングの手法を用いて若年教員の教職キャリアに応じた取組を行うとともに、その取組を学校組織で共有することで、PDC Aサイクルをとりながら、若年教員の育成を促進しようとするものである。

#### ① 学年組織における若年教員育成の取組

学年主任（メンター）が中心となって、ベテラン教員（コンシリエリ）とともに、年間の見通しをもって若年教員（メンティ）を育成する。

3者の関わり方については、資料6に示した通りである。この資料は、校長がキャリアに応じた人材育成



【資料6 学年組織による若年教員育成システム（校長より提案）】

の視点から表したものである。本研究は、若年教員育成を目指しているため、下線を引いたところに視点を当てて進めていくこととする。

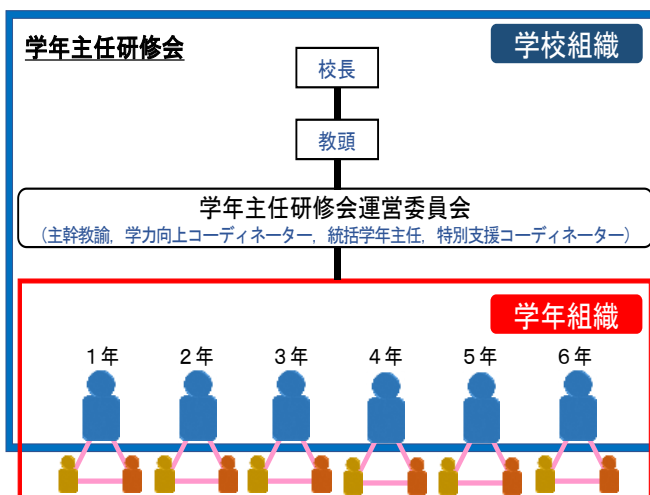
また、学年組織で若年教員を育成する時間として、毎週水・木曜日の2日間に学年研修会が設定されている。学年研修会では、資料5に示したような若年教員の資質・能力の育成の他に学校行事や学習計画の確認や学年の子どもの実態の共有を行っている。

#### ② 学校組織における若年教員育成の取組

校長が示す学年主任研修会の組織は、資料7に示したように校長、教頭、主幹教諭、学力向上コーディネーター、特別支援教育コーディネーターに加えて、各学年の学年主任の合計11名のメンバーで構成される。

なお、統括学年主任とは、第1学年～第6学年までの学年主任をまとめる役割を担う。

学年主任研修会運営委員会では、それぞれの立場から以下の3点について確認や検討、報告を行う。



【資料7 学年主任研修会組織図】

ア 主幹教諭が提案する学年主任研修会の内容の確認

イ 学力向上コーディネーターや統括学年主任が提案する資料についての検討

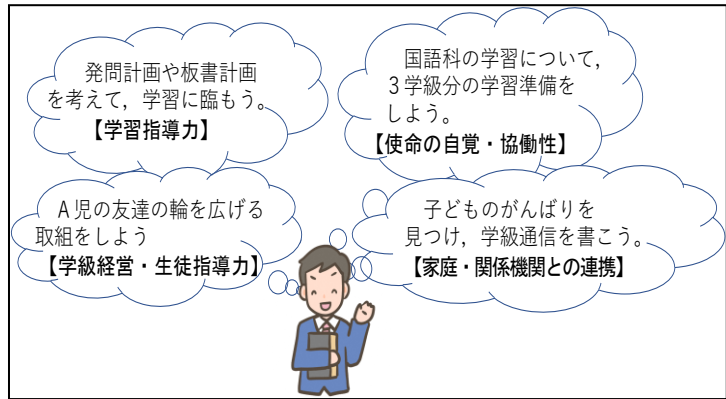
ウ 統括学年主任が各学年の若年育成の取組の進捗状況の報告

また、学校組織で若年教員の育成における評価（成果と課題）の報告と、改善の方向性を明らかにする時間として、毎月1回、月末に学年主任研修会が開催される。

### ③ 学年組織と学校組織の関係性

若年教員の資質・能力を育成することを目的として、PDCAサイクルを計画的・継続的に循環させる。PDCAサイクルは、「Plan（計画）→Do（実施）→Check（評価）→Action（改善）」の4つの段階で構成される。

若年の教員の資質・能力を育成するためには、若年教員のキャリアや課題分析、これまでの指導の反省などから目指すものを具体化した上でPDCAを回していく。また、メンターとメンティで話し合い、ともに課題意識をもった上で設定していくことも大切である。



【資料8 資質・能力の具体化】

本研究では、学年研修会と学年主任研修会は、1カ月の中で、資料9のように位置付けられる。

#### ア M-Plan

月の第1週で、学年主任が月の取組の重点を検討する。

#### イ M-Do, M-Check

##### あ S-Plan

学年研修会において、月の取組の重点を同学年の先生に提案する。

##### い S-Do

各学級において、取組の実践を行う（1～3週間）。

##### う S-Check

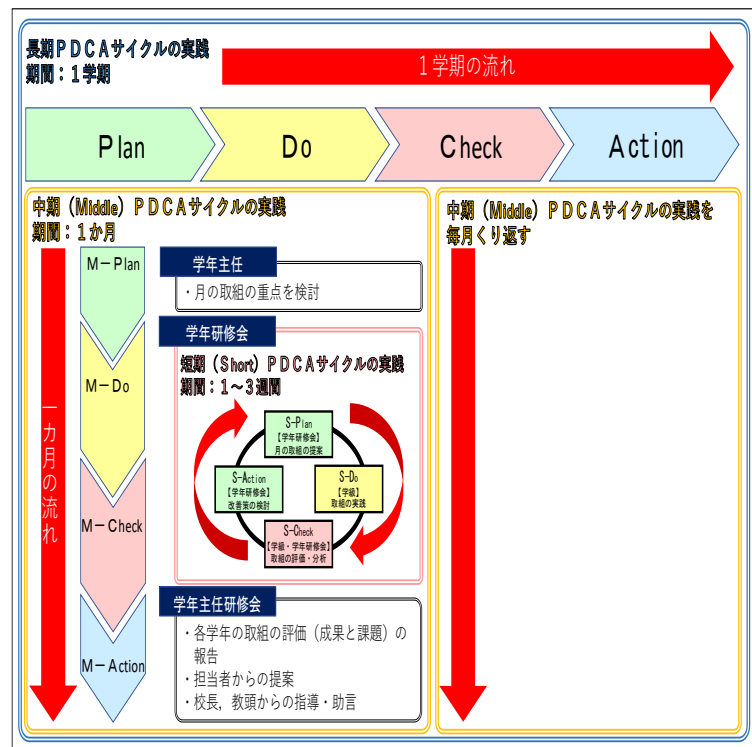
学級もしくは、学年研修会の中で、取組の評価・分析を行う。

##### え S-Action

学年研修会において、改善策の検討を行い、次の取組へとつなぐ。

#### ウ M-Action

学年主任研修会は、各学年から1カ月間の若年教員育成の取組の評価について報告を行った後、担当者（学年主任研修会のメンバー）が若年教員の資質・能力の育成に向けた提案を行う。その後、校長や教頭が次の月の実践のための指導・助言をする。学年主任は、その指導・助言を受けて、次の月の取組の重点を決めて、学年研修会の中で提案を行う。このサイクルを毎月行っていく。



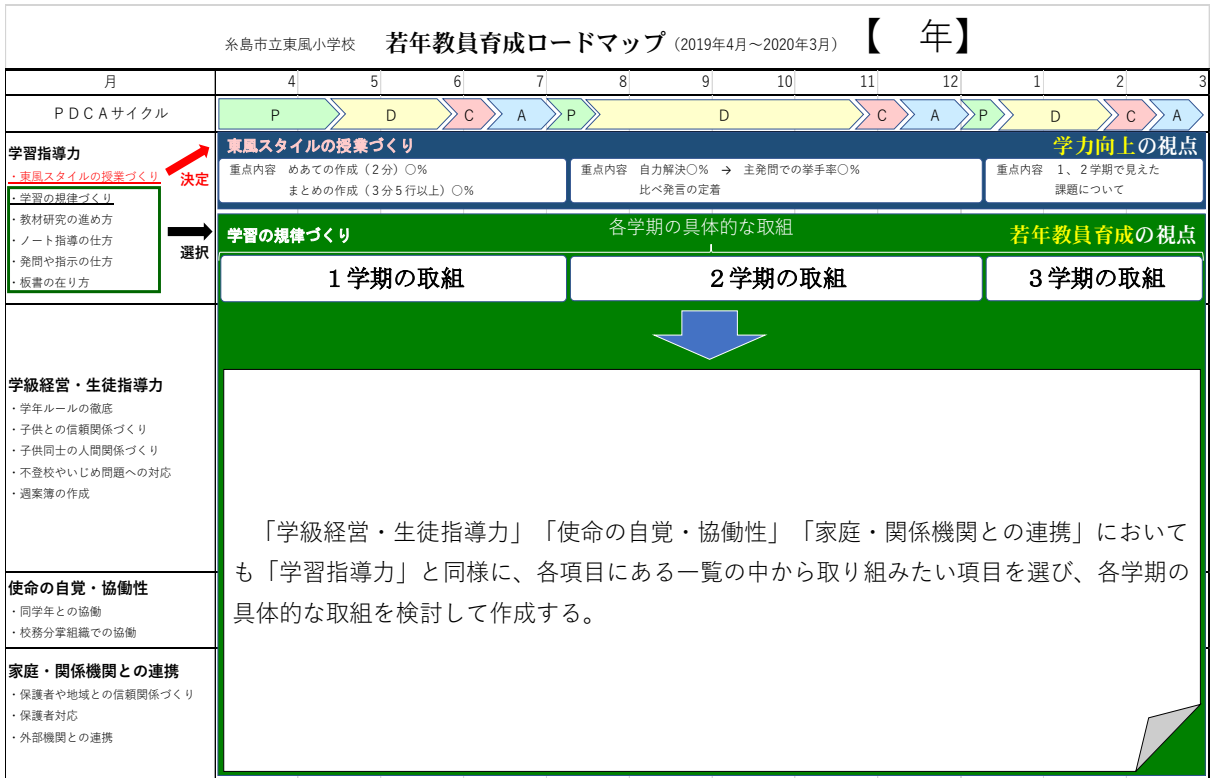
【資料9 学年主任研修会と学年研修会の関係性】



### 3 副主題の意味

#### (1) 若年教員育成ロードマップとは

若年教員のキャリアに応じて、1年間で身に付けさせたい資質・能力を明らかにし、P D C A サイクルをとりながら、段階的に資質・能力を高めていくための道筋を示したものである。



【資料10 若年教員育成ロードマップ】

この若年教員育成ロードマップ(資料10)は本校が2018年に作成した学力向上戦略マップを参考に作成したものである。若年教員育成ロードマップは、1学期に1サイクル回るように設定している。作成にあたっては、「学習指導力」「学級経営・生徒指導力」「使命の自覚・協働性」「家庭・関係機関と連携」の4つの項目について具体的な取組を書くようにしている。なお、本研究は若年教員育成と学力向上を一体として取り組んでいる。そのため、学習指導力の一つ目の「東風スタイルの授業づくり(校内研究の日常化)」については、学年の発達段階に応じて目標の数値設定は異なるが、どの学年も共通して実践する。

また、この取組内容については、『若年教員育成プログラム42(鈿持勉氏)』(資料11)の年間計画と取組の実際を参考にすることで、各学年主任の先生も作成できるようにする。

回数	月	主な指導内容	回数	月	主な指導内容
1	4月	◎教育公務員としての第一歩をどう歩むか	22	9月	◎道徳授業の在り方
2		◎子供との出会いをどう考えるか	23		◎聞く・話す活動を充実させるために
3		◎始業式、何を話すか	24	10月	◎文字感覚を高める
4		◎一週間の計画、教材研究とは	25		◎板書の効率的な活用方法とは
5		◎子供を見取るとはどういうことか	26		◎研究授業で力量をつけるⅡ
6		◎学級における人権教育とは	27		◎総合的な学習の時間、機能しているか
7		◎子供は行事で成長する	28	11月	◎プレゼンテーション能力を高める
8	5月	◎専門性を高めることの大切さ	29		◎生活指導の力量が問われている
9		◎学習規律は保っていますか	30		◎国際理解教育の推進
10		◎生徒指導上の課題は見えていますか	31	12月	◎学級だよりの作り方
11	6月	◎公開授業に向けて	32		◎ティーム・ティーチングの在り方
12		◎児童理解をどう深めるか	33		◎評価観の転換が急務
13		◎校内研究で何を学ぶか	34	1月	◎学校評価とは何か
14		◎研究授業で力量をつけるⅠ	35		◎教育課程の編成とは何か
15	7月	◎通知表の役割、評価力をつける	36		◎指導要録の記述について
16		◎夏休み休業日に向けて	37	2月	◎意図的・計画的・継続的な取組
17	8月	◎自己を振り返る、授業力をつける	38		◎一年間を振り返る、レポート報告Ⅰ
18		◎授業力をつける	39		◎一年間を振り返る、レポート報告Ⅱ
19	9月	◎優先順位を決定して学級経営に関わる	40		◎一年間を振り返る、レポート報告Ⅲ
20		◎学期始めを機に歩むために	41	3月	◎教育公務員一年目を終えるにあたってⅠ
21		◎改めて人権教育の推進を	42		◎教育公務員一年目を終えるにあたってⅡ

※「若年教員育成プログラム42」【鈿持 勉 明治図書】より

【資料11 若年教員育成プログラム】

(2) 若年教員育成評価表とは

若年教員育成ロードマップに示した取組の達成規準を設定し、その取組の結果を月ごとに振り返るためのものである。

令和元年度 若年教員育成評価表									
1 学期		4…設定した目標を高度に達成できた 3…設定した目標を概ね達成できた 2…設定した目標を達成できていない 1…規準等の見直しが必要						【 年】	
		メンティ 名前 ( )		メンター 名前 ( )		コンシリエリ 名前 ( )			
運 営 計 画									
目標項目		達成規準		メンティ記入		メンター記入		コンシリエリ記入	
				6月 7月 自由記述		6月 7月 自由記述		6月 7月 自由記述	
学級指導力	東風スタイルの授業の定着	東風スタイルの授業づくり 東風スタイルの授業を週〇回以上実施	若年教員	学年主任	ベテラン教員				
	重点目標① 見直しをもとにしたためづくり	めあての自力作成率が〇%を超える (〇分間)	自己評価 (自分の取組の評価)	他者評価 (メンティの取組の評価)	他者評価 (メンターの取組の評価)				
	重点目標② 自己の学びを振り返りまとめる作成	まとめの自力作成率が〇%を超える (〇分間〇行以上)							
	全国学力・学習状況調査の分析 学年の課題改善	全国学力・学習状況調査の取組 国語科 算数科 学力向上の視点							
	国語科の授業づくり 読解文の授業づくりの在り方を学ぶ	若年教員育成ロードマップで 考えた具体的な取組についての 達成基準を作成する	毎月 [4, 3, 2, 1] (高) ← (低)	1学期終了後 自由記述による評価を行う					
生徒指導力・ 学級経営	学年ルールの徹底 1学期の重点目標の徹底	「学級経営・生徒指導力」「使命の自覚・協働性」「家庭・関係機関との連携」においても「学習指導力」と同様に、 達成基準の作成と毎月の自己(他者)評価を行う。							
子供同士の人間関係づくり セルフエステームの向上									
学年研修会の充実 学年で子どもを育てる意識の向上									
使命の自覚・ 協働性	教科担当制の導入 学期開始前の解消								
家庭・関係機 関との連携	家庭との連携 保護者との信頼関係づくり								
	地域との連携 総合的な学習の時間の単元づくり	若年教員育成の視点							

【資料 12 若年教員育成評価表】

この若年教員育成評価表(資料12)の作成にあたっては、「学習指導力」「学級経営・生徒指導力」「使命の自覚・協働性」「家庭・関係機関との連携」の4つの項目について、達成規準を設定する。なお、「東風スタイルの授業づくり」と「全国学力・学習状況調査の取組(校内研究で結果の分析を行った後に追加)」については、全学年共通の実践として必ず取り入れるようにする。また評価について、若年教員は、自分の取組に対して自己評価を行う。その一方で、学年主任は、若年教員の取組を、ベテラン教員は、学年主任の若年教員に対する関わりを他者評価する。評価については、次の2点で行う。①月ごとに1(低)～4(高)の4段階で行う。②学期末に自由記述で行う。

若年教員育成評価表(資料11)の目標項目の欄で枠の色が黄色になっている項目については、学力向上自己評価表として作成する(資料13)。このようにすることで、メンターとメンティも自分の学級の実践を振り返り、学年の評価について共有し、次の月の課題を明らかにすることができる。

学力向上自己評価表【〇年】					
4…設定した目標を高度に達成できた 3…設定した目標を概ね達成できた 2…設定した目標を達成できていない 1…規準等の見直しが必要					
6月	目標項目	達成基準	自己評価		
			メンティ (6月)	メンター (6月)	コンシリエリ (6月)
学習指導力	東風スタイルの授業の定着	東風スタイル授業週〇回以上実施する			
	重点目標① 見直しをもとにしたためづくり	めあての自力作成率が〇%を超える(〇分間)			
	重点目標② 自己の学びを振り返りまとめる作成	まとめの自力作成率が〇%を超える(〇分間〇行)			
学級経営・ 生徒指導力	全国学力・学習状況調査の分析 学年の課題改善	若年教員育成ロードマップで 考えた具体的な取組についての 達成基準を作成する			
使命の自覚・ 協働性	学年研修会の充実 学年で子どもを育てる意識の向上				
家庭・関係機 関との連携	家庭との連携 保護者との信頼関係づくり				

【資料 13 学力向上自己評価表】



### (3) 若年教員育成ロードマップ・評価表の活用とは

若年教員育成ロードマップをもとに、資質・能力育成の年間計画を明らかにするとともに、若年教員育成評価表を使って、月ごとの取組の成果と課題を分析しながら、目標達成に向けて実践を積み上げていくことである。

具体的には、学年組織、及び学校組織の中で、次の6つのポイントを大切にしながら、実践を行うことである。

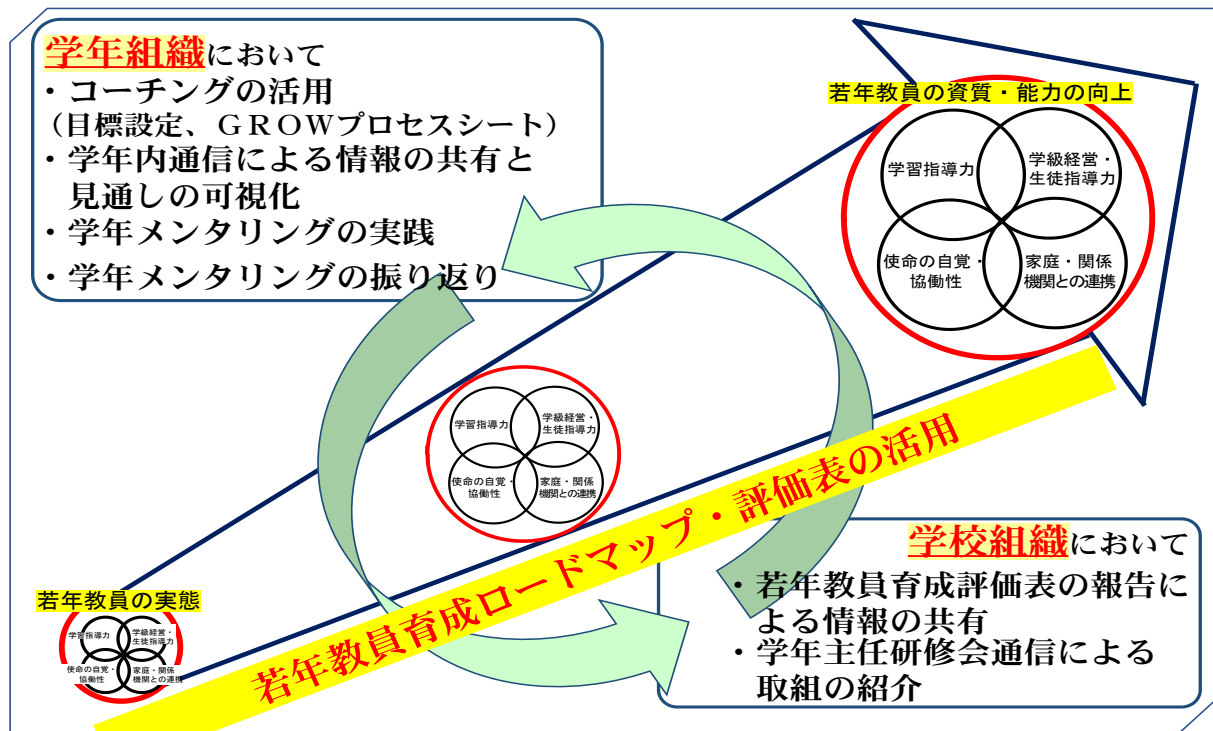
#### 〔学年組織〕

- ・ コーチングスキルを活用した目標設定やGROWプロセスシートの作成
- ・ 学年内通信による情報の共有と見通しの可視化
- ・ 若年教員育成ロードマップをもとに学年メンタリングの実践
- ・ 若年教員育成評価表を活用した学年メンタリングの振り返り

#### 〔学校組織〕

- ・ 若年教員育成評価表の報告による情報の共有
- ・ 学年主任研修会通信による取組の紹介

※詳しくは、研究の構想で述べる。



【資料 14 若年教員の資質・能力の向上に向けた取り組み】

## 4 研究の目標

若年教員育成ロードマップ・評価表の活用を通して、若年教員の資質・能力を育成する組織運営の在り方を究明する。

## 5 研究の仮説

学年組織と学校組織が連携しながら、若年教員育成ロードマップ・評価表の活用をした取組を計画的・継続的に行うと、若年教員の資質・能力を育成することができるであろう。

## 6 研究の構想

### (1) 学年組織における取組

#### ① コーチングを活用した目標設定（修正）やGROWプロセスシートの作成

##### ア コーチングとは

コーチがクライアント（相談者）に答えを与えるのではなく、対話を通してクライアントが自分で問題解決していく過程を（コーチが）相談に乗り、支援することである。

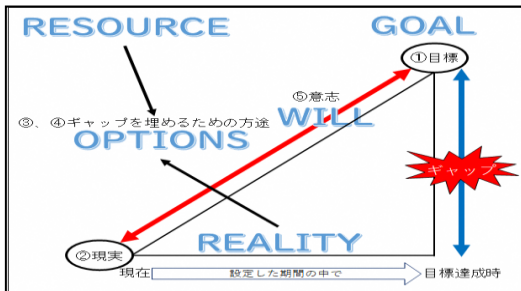
本研究においてコーチの役割を学年主任（メンター）が、クライアントの役割を（メンティ）が行う。

##### イ GROWプロセスシートとは（校長より指導・助言をもらい2学期から実施）

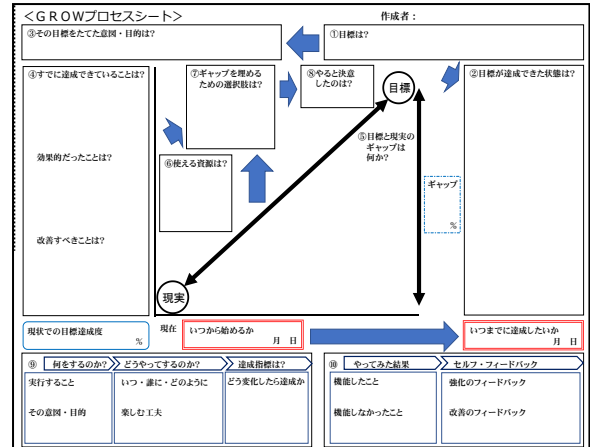
GROWモデルをもとに、現状を踏まえて、目標達成までの道筋を明らかにしたものである。

メンターが、GROWモデル（資料15）を意識して、以下のような①～⑩の手順でメンティにコーチングをすることにより、いつまでに何を達成すればよいのか、そのために何をするのかを明確にする（資料16）。

- ①GOAL（目標）の明確化
- ②REALITY（現実）の把握
- ③RESOURCE（資源）の発見
- ④OPTIONS（選択肢）の創造
- ⑤WILL（意志）の確認



【資料15 GROWモデル】



【資料16 GROWプロセスシート】

#### ② 学年内通信による情報の共有と見通しの可視化

- 毎週水曜日と木曜日に開かれる学年研修会では、学年内通信（資料17）を発行し、以下の5点について確認・協議を行う。
- 2週間分の学校・学年行事の確認
  - 次週の時間割の検討
  - 子どもの実態の共有
  - 学年の短期PDCAサイクルの提案
  - 各教科担当からの提案

The diagram shows a '第6学年 学年内通信' (6th Grade Year Communication) form. It includes a table for '来週のもの学校行事と学年行事の内容' (Next week's school and year events) with columns for '安全点検日' (Safety check date), '学校行事関係' (School event related), and '学年行事の内容' (Year event content). The table lists events from 1/1 to 1/12. A red box highlights a '学年ルールの徹底へ向けた短期PDCAサイクル' (Short-term PDCA cycle for thorough implementation of school rules). The cycle includes: Plan (計画), Do (実行), Check (評価), and Action (改善). The Do section lists '7/8～19の2週間取組, 「〇」を目指す。' (2-week implementation from 7/8 to 19, aiming for 'O'). The Check section lists '7/24の学年研修会に交流する' (Exchange at the year meeting on 7/24). The Action section lists '達成状況に応じて、課題改善の方策を検討するか、次のステップへと進めるかを検討する。' (Consider strategies for improvement or next steps based on achievement status).

【資料17 学年内通信】

### ③ 学年メンタリングの実践

メンターは、学力向上に向けて学年の進捗状況を管理しながら、メンティのコーチを行う。メンティは、メンターのコーチを受けて、自分の目標に向けて実践の積み上げを行う。コンシリエリは、メンターやメンティの相談を受ける。

### ④ 若年教員育成評価表を活用した学年メンタリングの振り返り

学年メンタリングを実践した後は、若年教員育成評価表を活用して、メンター、メンティ、コンシリエリがそれぞれの立場から実践の振り返りを行う。

## (2) 学校組織における取組

### ① 若年教員育成評価表の報告による情報の共有

若年教員育成ロードマップをもとに行った取組について、若年教員育成評価表で評価したものを学年主任研修会で報告し合うことを通して、情報の共有を行う。

### ② 学年主任研修会通信による取組の紹介

統括学年主任として、若年教員育成について伝えたいことを「ステップアップ（学年主任研修会通信）」として発行する。

## (3) 統括学年主任の働きとそれに関わる学年主任の働き（資料 18）

統括学年主任の働き		学年主任の働き
■計画・提案	○学年主任研修会の企画・運営 ○若年教員育成ロードマップ・評価表モデルの提示 ○授業づくりや学級経営の在り方、学年メンタリングの実践等を学年主任研修会通信で紹介	○若年教員育成ロードマップ・評価表の作成 ○学年メンタリングの取組の実践とその紹介
■連絡調整	○必要に応じて学年主任研修会運営委員会を開催 (主幹教諭と学力向上コーディネーターと打合せ) ○若年教員育成ロードマップの実践の進捗状況の確認	○若年教員育成ロードマップの実践 ○若年教員育成評価表による報告
■指導・支援	○他学年の若年教員育成の取組に関わる内容について指導・支援	○若年教員が担任する学級の学力を学年全体で向上させること

【資料 18 統括学年主任と学年主任の働き】

## (4) 実践計画（1学期に1回、長期PDCAサイクルをまわす）（資料 19）

段階	時期			活動内容	評価方法
	1学期	2学期	3学期		
<u>(Plan)</u> 目標の設定や修正	5月	8月	12月 下旬	若年教員育成ロードマップを作成したり、修正したりする。	
<u>(Do)</u> 日常の実践	6月 ～ 7月 中旬	9月 ～ 12月	1月 ～ 3月	若年教員育成ロードマップに基づいて、実践する。 <b>中期PDCAサイクルと短期PDCAサイクル</b>	日常の実践の観察 月末に若年教員育成評価表の記入 (4段階評価)
<u>(Check)</u> 評価	7月 下旬	12月 下旬	3月 下旬	学年研修会において、各学期の取組の成果と課題を明らかにする。	若年教員育成評価表の記入 (4段階評価と自由記述)
<u>(Action)</u> 改善	7月 下旬	12月 下旬	3月 下旬	学期末の学年主任研修会において、実践の成果と課題を報告し、管理職から指導・助言をもらう。	

【資料 19 PDCAサイクルを意識した実践計画】

## 7 研究の実際

### 〔第6学年の1学期の実践〕

若年教員育成の取組において、4つの資質・能力（「学習指導力」「学級経営・生徒指導力」「使命の自覚・協働性」「家庭・関係機関との連携」）のいずれの育成も欠かすことのできない重要なものであると考える。しかし、学校全体の学力向上を図ることと、それに伴って学級・学年間差を無くすことが、本校の重点課題である。そのことを踏まえて、実践については「学習指導力」に焦点化して述べていくこととする。

#### (1) Plan (長期PDCAサイクル) …目標の設定

5月上旬、若年教員育成ロードマップの作成を行った。ねらいは、今年1年間で身に付けたい資質・能力について明らかにし、計画的・継続的に実践の積み上げを図ることである。そのために、同学年の若年教員に対してコーチングを行った。

#### コーチングを活用した若年教員育成ロードマップの作成（「学習指導力」について）

コーチングの内容 (CO…学年主任メンター CR…若年教員メンティ)	
G	CO 「この1年間で教師として身に付けたいことは、何ですか？」
	CR 「国語の授業力を高めたいです。」
R	CO 「具体的には、子どもにどのような力をつけたいと考えていますか？」
	CR 「子どもに読み物教材の読み方を身につけさせたいです。詳しく言うと、説明文の要旨や物語文の主題を読み取ることで、本を読む楽しさを教えたい。」
O	CO 「昨年も同学年をして学習中の発問や板書は、子どもの思考の流れをきちんと整理できていていいと思いますが、何か課題に感じていることはありますか？」
	CR 「教材研究がまだ不十分なため、学習内容の核心に迫るような発問は十分にできていないと感じています。」
W	CO 「その課題を改善するためには、どういったことをする必要があると思いますか？」
	CR 「指導書通りに流すばかりでなく、教材研究をして、その研究をもとに自分なりの単元構成を作成し、授業提案を行うことが必要だと思います。」
	CO 「今年一年でどうやって実践を行おうと思いますか？」
	CR 「各学期に1単元ずつ読み物教材の授業実践を行っていききたいと思います。」

#### 【資料20 コーチングした内容】

このような話し合い（資料20）をもとに、資料21の若年教員育成ロードマップを作成した。

糸島市立東風小学校 若年教員育成ロードマップ (2019年4月～2020年3月) 【6年】	
月	4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3
PDCAサイクル	P D C A P D C A P D C A
<b>学習指導力</b> ・東風スタイルの授業づくり ・学習の規律づくり ・教材研究の進め方 ・ノート指導の仕方 ・発問や指示の仕方 ・板書の在り方	東風スタイルの授業づくり 重点内容 めあての作成(2分) 80% まとめの作成(3分5行以上) 70% 国語科の授業づくり(教材研究の進め方、ノート指導、発問や指示の仕方) 指導 授業実践(説明文) 考察 授業展開 指導 教材研究 授業実践(物語文) 考察 授業展開 教材研究 「筆者の意図をとらえ、自分の考えを発表しよう」 子供の反応 板書や発問 指導 教材研究 「自分の感じたことを、朗読で表現しよう」 子供の反応 考察 授業展開 子供の反応 考察 授業実践(詩) 「生きる」 考察 授業展開
<b>学級経営・生徒指導力</b> ・学年ルールの徹底 ・子供との信頼関係づくり ・子供同士の人間関係づくり ・不登校やいじめ問題への対応 ・過剰な対応	学年ルールの徹底 1学期 重点事項の実践 考察 修正 2学期 重点事項の実践 考察 修正 3学期 重点事項の実践 考察 修正 学年初め、認める学級づくり 自分を目指す学級づくり 子供同士の人間関係づくり 指導 実践 「仲間よきを見つめる」(心の表彰台) 考察 修正 指導 社会性と情動の学習の進め方(S E L - 8 S)の取組 実践 「関係づくり」(手つだってあげよう) 考察 修正 実践 「クラスのまとまり」(〇〇と言えば) 考察 修正 不登校やいじめ問題への対応 ※即日対応、学年対応
<b>使命の自覚・協働性</b> ・同学年との協働 ・校務分掌組織での協働	学年研修会の在り方 学年研修会において ・担当教科の提案…国語、特活、体育、(総合) ・担当行事の提案…入学式、お迎え集会
<b>家庭・関係機関との連携</b> ・保護者や地域との信頼関係づくり ・外部機関との連携	保護者との信頼関係づくり 家庭とのつながり 全体…学級通信 個別…連絡帳や電話連絡、家庭訪問 総合的な学習の時間の単元づくり 学年で連携しながら、総合的な学習の時間のカリキュラム作成

#### 【資料21 若年教員育成ロードマップ】

この若年教員育成ロードマップと若年育成評価表については、5月の学年主任研修会において、モデルとして提示した。



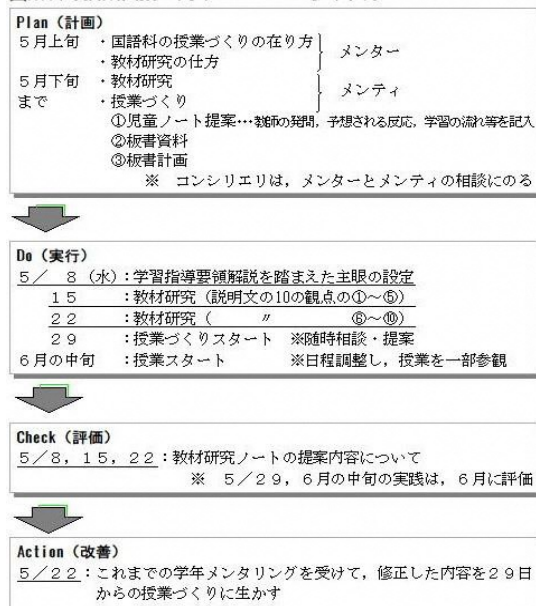
## (2) Do・・・日常の実践

5月上旬～6月中旬にかけて、国語科「筆者の意図をとらえ、自分の考えを発表しよう（説明文）」の学習で、「学習指導力」の実践を行った（資料 21）。ねらいは、メンティがコーチングの中でも課題に挙げていた教材研究の仕方を知り、指導書通りではなく、自分の教材解釈に基づいた授業づくりを行うことである。そのために、①授業実践までの見通しを明確にし、②学年メンタリングのもと、授業実践を行うといった流れで実践の積み上げを図った。

### ① 学年内通信による情報の共有と見通しの可視化（5月の中期PDCAサイクル）

メンターとメンティ、コンシリエリで話し合い、以下のような予定を設定（資料 22）した。

#### 国語科の授業実践へ向けたPDCAサイクル



#### ア Plan（計画）

5月上旬

メンター・・・国語科の授業づくりの在り方と教材研究の仕方について指導をする。

5月下旬まで

メンティ・・・メンターに指導を受けたことをもとに、教材研究を行う。

コンシリエリ・・・メンターとメンティの悩みの相談にのる。

#### イ Do（実行）

5月の第2週～5月の第4週まで、毎週計画に従って、メンティが提案（短期PDCAサイクル）を行う。

※それ以降の内容については、6月の中期PDCAサイクルで明らかにする。

### 【資料 22 日常の実践の見通し】

#### ウ Check（評価）

メンターとコンシリエリの指導・助言をもとに、提案を振り返る。

#### エ Action（改善）

Checkで明らかになったことを踏まえて、次回の提案につなげる。

このような計画の中、毎週水曜日に、学年メンタリングを行う時間を設定することで、メンティは学年で提案する前にメンターやコンシリエリに相談するなど、計画的・継続的に実践を積み上げていこうとする姿が見られた。

### ② 学年メンタリングの実践（5月上旬～6月中旬までの実践）

#### ア メンターによる国語科の授業づくりの在り方と教材研究の仕方についての指導

#### 国語科授業づくりの5ステップ

- ① 「学習指導要領解説 国語編」を読み、主眼の明確にする
- ② 「説明文の10の観点」（白石範孝氏）をもとに、教材研究をする
- ③ 単元を貫く「問い」を考える（校内研究との関連）
- ④ 単元の活動構成を考える
- ⑤ 一単位時間の活動構成を考える

授業づくりには、教材観、指導観、児童観の3つの観点から考えることが必要である。しかし、今回はメンティの課題である教材観（下線部）に重点を置いて、資料 23 のような流れで授業づくりを行う。

### 【資料 23 授業づくりの流れ】



具体的には、メンターが学年研修会で資料 24 を提示しながら、授業づくりについて説明した後に、コンシリエリからも国語科の授業をする上で大切にしていることについて助言をしてもらった。

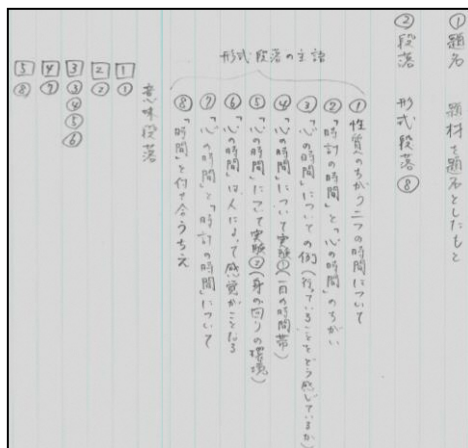
国語科の授業づくり ～説明的な文章の場合～	
国語科の授業づくりは、次の5つのステップを踏まえて行います。	
① 「学習指導要領解説 国語編」を読む	③ 単元を貫く「問い」を考える 子ども達の初読の感想から「問い」をつくることがありますが、単元を書くような深い「問い」が生まれることは難しいので、教師自身が深い「問い」をあらかじめもっておく必要があります。この深い「問い」については、筆者の主張が端的に表された題名をもとに考えるといいと思います。
② 「説明文の10の観点」(白石範孝氏)をもとに、教科書をもとに教材研究をする	④ 単元の活動構成を考える 学習過程については、白石範孝氏の「三段階の読み」を踏まえて、学習指導要領解説に書かれている流れで行います。
③ 単元を貫く「問い」を考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>○構造と内容の把握 (全体読み→細部読み→全体読み)</li> <li>①文章の三部構成 (序論・本論・結論)を読む (全体読み)</li> <li>②本論をさらに分ける (細部読み) 事例や結果などの関係をつかむ</li> <li>③文章構成図を考える (全体読み) 要旨をとらえる</li> <li>○精査・解釈 ・目的に応じて、文章の中から必要な情報を取捨選択したり、整理したり、再構成したりする</li> <li>・筆者の論理を批判的に読む</li> <li>○考えの形成 ・学習を通して学んだことを既有的知識と結びつけて自分の考えを形成する</li> <li>○共有 ・自分の考えと他者の考えを比較して、自分の考えを広げる</li> </ul>
④ 単元の活動構成を考える	
⑤ 一単位時間の活動構成を考える	⑤ 一単位時間の学習指導過程を考える 一単位時間の学習指導過程は、「東風スタイル」をベースに考えていきます。だから、子ども達の「問い」を大切に授業づくりを行います。まずは、「課題の明確化」の段階です。この段階では、子どもが「問い」をもつような問題設定・提示のくふう、発問を考えます。次に、「解決の見通し」の段階です。この段階では、学びの変容を実感するために、予想を立てたりもします。さらに、「自力解決」の段階です。この段階では、主発問に対して、自分の考えをつくり出します。ここでは、単元を貫く「問い」と関わるような内容を取り上げる必要があります。そして、「学び合い」の段階です。この段階では、自他の考えが比較できるように、交流ボードを活用したり、友達のを解釈したりすることを通して、自分の考えを深めたり、広げたりします。最後は、「振り返り」の段階です。この段階では、キーワード化された学習内容を踏まえて「自分の学びを振り返ります」。
① 「学習指導要領解説 国語編」を読む	
<b>C 読むこと</b> (1) 読むことに関する次の事項を身に付けることができるように指導する。 <b>◎構造と内容の把握</b> ア 事実と感想、意見などの関係を叙述を基に押さえ、文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること。 <b>◎精査・解釈</b> サ 目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けたり、論の進め方について考えたりすること。 オ 文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめること。 カ 共有 キ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。	
※ ◎のところが、説明文の学習内容となります。	
② 「説明文の10の観点」(白石範孝氏)をもとに、教科書をもとに教材研究をする	
①題名 題名から題材や話題などをつかむ。	⑥三部構成 作品を「序論・本論・結論」に分ける。
②形式段落 いくつもの形式段落に分かれているか。	⑦問いと答え 問いはいくつあるか、どこにあるか、それに対する答えはなにか。
③意味段落 いくつもの意味段落に分かれているか。	⑧文章構成図 形式段落の関係、つながりを表した図
④形式段落の主旨 それぞれの形式段落が何について書かれているか。	⑨事例(具体と抽象) 具体(実験・観察・調査・事例など)と抽象的なものは何か。
⑤要点 形式段落ごとに大切な一文を抜き出し、まとめる。	⑩要旨(主張) 筆者の主張をとらえる。
高学年の説明文指導では、要点をもとに文章構成図を考え、要旨をとらえることができるようになること、筆者の論理を理解することが主にならなければなりません。教材研究をする際には、先入観を無くすために、朱書きに教科書を読まずに、児童用教科書を用いることが大切です。	

【資料 24 学年研修会で提示した資料】

メンティからは、「教材研究の進め方を先生方から話していただいたので、授業をするまでに何をすべきか、また自分の課題は何か明確になりました。」という言葉が返ってきた。このことから、授業づくりへ向けての実践意欲を高まったと考える。

イ メンティによる国語科の授業づくり

あ 「教材研究」の段階



資料 25 は、メンティが教材文「時計の時間と心の時間」を「説明文の10の観点」をもとに、教材研究したノートの一部である。児童用の教科書を使いながら要点や三部構成(序論・本論・結論)等を考えることで、子どものつまずきや、思考の流れを捉えることができたという感想をもっていた。さらに、教材研究をすることで、国語科の指導解説書どおりの流れではなく、高学年の目標である、文章構成の理解に重点を置いた授業づくりをしようということで、以下のような単元構成に変更した(資料 26)。

【資料 25 教材研究ノート】

国語科の指導解説書の大まかな流れ	メンティの考える大まかな流れ
①単元名とリード文を確認し、学習課題の設定	①題名読みから学習課題の設定
②表を活用した各段落の内容の読み取り	②各段落の内容の読み取りをもとに文章構成図の作成
③表現のくふうの読み取り	③文章構成図を活用した要約の作成

【資料 26 メンティの考える単元構成】

## い 「授業実践」の段階



【資料 27 学習中の交流の様子】

本時は、全体の文章構成を捉えることで筆者の論理を読み解き、要約することをねらいとした。

学習展開は、以下の通りである。

- ①序論と結論部分の文章構成図を全体で確認する。
- ②本論部分の文章構成図を考える。
- ③文章構成図をもとに要約する。

### 授業実践後の学年メンタリング（資料 28）

メンター：	授業を終えて、どのように感じましたか。
メンティ：	文章構成図について、子ども達が叙述を根拠に文章構成図についていろいろと意見を言い合ったのがよかったです。
メンター：	子ども達が活発に意見を言い合えたのは、何がよかったからだと思いますか。
メンティ：	やっぱり、文章構成図を自由に書かせるのではなく、3つから選択させて、そう思う根拠を話し合わせたのがよかったと思います。
メンター：	先生がこだわって教材研究をし、子どもの実態把握をていねいに行い、つまずきを的確に捉えて授業を展開した成果ですね。
コンシリエリ：	子ども達の意見が2つに分かれたと思うけど、どちらが正しいとかありますか。
メンティ：	答えは1つのつもりでしたが、子どもの意見を聞いていたら、納得したところもありました。だから、文章構成図も1つとは限らないなと思いました。
コンシリエリ：	私もどちらも正しいと思います。大切なのは、きちんと叙述を根拠として、筋が通ったことを言えることです。
メンター：	選択させる文章構成図については、検討の余地がもっとあったようですね。でも、その後の文章構成図をもとに60～80字で要約文を書く活動は素晴らしかったです。先生が、事前に自分で要約文を作成していたことによって、分量も適正だったし、子どもに的確なアドバイスをすることができていました。
メンティ：	80%以上の子どもが書いていたので、やっぱり、自分でやってみるということが大切だと改めて感じました。
メンター：	今回授業をしてみて課題に感じたことを次の実践へとつなげていきましょう。

### 【資料 28 学年メンタリングの会話の内容】

学年メンタリング後には、本文を見ながら、文章構成図の選択肢を考え直し、再度提案するなど、自分の課題をすぐに改善し、次につなごうという姿勢が見られた。

### (3) Check・・・評価

7月下旬、国語科「筆者の意図をとらえ、自分の考えを発表しよう（説明文）」の実践を振り返り3つの点について評価を行った。ねらいは、それぞれの立場によって違う。メンティのねらいは、自分の実践の成果と課題を明らかにすることで、次の実践へとつなぐことである。メンターのねらいは、メンティの実践を踏まえて若年教員育成ロードマップの見直しを行うことである。コンシリエリのねらいは、メンターとメンティの取組の様子を振り返り、今後の自分の関わり方の見直しを行うことである。そのために、若年教員育成評価表の評価項目を予め知らせて置き、その項目を踏まえてそれぞれの立場から学年メンタリングに臨む体制づくりを整えていた。
---

### 若年教員育成評価表を活用した学年メンタリングの振り返り（資料 29）

目標項目	達成規準	メンティ記入		メンター記入		コンシリエリ記入	
		6月	7月	6月	7月	6月	7月
学級指導力 国語科の授業づくり 説明文の授業づくりの在り方を学ぶ	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける説明文の『読む』力を明らかにする。	3	3	3	3	3	3
	説明文の読み「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	4	3	3	3
	教材研究をもとに、単元計画や1単位時間の学習指導過程をくふうして授業実践を行う。	3	3	3	3	3	3

【資料 29 若年教員育成評価表】

(4) Action・・・改善

7月下旬、学年主任研修会において、各学年が作成した若年教員育成評価表をもとに、1学期の実践を振り返った。ねらいは、1学期の実践の成果と課題を明らかにすることで、2学期の実践へとつなぐことである。そのために、事前に学年主任研修会運営委員会を開き、主幹教諭と学力向上コーディネーターとともに、2学期の実践に向けて協議を行った。

学年主任研修会運営委員会の開催（資料30）

協議した内容は、以下の3点である。

＜学力向上コーディネーターからの提案＞

- ・「学期末テスト」の結果を受けて、2学期に重点を置く学年の検討をする。

＜統括学年主任からの提案＞

- ・若年教員育成ロードマップの修正案について、学力向上コーディネーターが作成した学力向上ロードマップと比較して検討をする。
- ・2学期の若年教員育成評価表の形式を提案し、修正を行う。

＜主幹教諭からの提案＞

- ・学力向上コーディネーターと統括学年主任の提案内容を受けて、学年主任研修会の要項の修正を行う。
- ・「学年メンタリングの実践の取組報告（各学年主任より）」を行うことを発案する。

学年主任研修会の開催（資料31）

① 若年教員育成評価表の報告による情報の共有

各学年主任が作成した若年教員育成評価表（資料32）をもとに、1学期に取り組んだ実践について報告を行った。



【資料30 学年主任研修会運営委員会の様子】



【資料31 学年主任研修会の様子】

令和元年度 若年教員育成評価表										
1学期		4…設定した目標を高度に達成できた 3…設定した目標を概ね達成できた 2…設定した目標を達成できていない 1…規準等の見直しが必要						【6年】		
		メンティ 平原			メンター 後藤			コンシリエリ 中村		
目標項目		達成規準		運 営 計 画				コンシリエリ記入		
				メンティ記入		自由記述		メンター記入		
				6月	7月	6月	7月	6月	7月	
学級指導力	東風スタイルの授業の定着	東風スタイル授業週に3回以上実施する	3	3	東風スタイルのもと、実態できる教科や内容を調査で確認し、計画的に取り組むことができた。しかし、書かせるだけではなく、質を高めていくことが今後の課題である。 （「あえて」と「まとめ」の内容等）	3	3	単元のゴール像を意識した授業づくりを日々実践することができた。あえてつなぐための「見直し」、まとめを書かせるための「キーワード提示」を意識した実践をすることができた。子どもが自力作成するための手立てをきちんとつたれているのがいいと思う。	3	3
	東風スタイルの授業の定着	あての自力作成率が70%を超える（2分間）	2	3		3	3		3	3
	東風スタイルの授業の定着	あての自力作成率が70%を超える（3分間で5行）	3	3		3	3		3	3
	東風スタイルの授業の定着	あての自力作成率が70%を超える（3分間で5行）	3	3		3	3		3	3
学級指導力	全国学力・学習状況調査の分析	10%以上の子どもが条件にあった文をかく	3	3	自分の考えを書ける際に、キーワードの言葉や数字を参照し、焦点化することを心がけた。そうすることで、思考の深まりにつながったと考える。	3	3	国語科の教科担当として、「説明文の授業づくり」と関連付けて、文章構成をもとに筆者の主張を書く活動や、字数を制限するという条件をつけて授業できた。全国学力・学習状況調査の分析と日本の授業を上手に関連付けて授業できたところよかった。	3	3
	学級の課題改善	70%以上の子どもが算数用語を使って筋立ててかく	2	3		3	3		3	3
学級指導力	学級指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける説明文の「読む」力を明らかにする	説明文の「読む」力を明らかにする	3	3	「児童用の教科書を教師自身が何回も読むこと」から教科研究は始まるということを後藤先生から学び、子どもの思考や読解スキルを伸ばしながら、授業づくりの「読解力」について学ぶことができた。次は、「説明内容」に目を向け取り組んでいきたい。	3	3	授業づくりに向けて、学習指導要領解説を参考にしながら「10の観点」で教材分析をし、必要な観点を選んで授業構想を考えた。子どもに読解させることができた。今後も自主的に授業、修正を繰り返す等、自己課題に取り組んでいく。教科研究に力を入れたい。どの子にもわかる授業づくりをしたいという真摯な姿勢は高く評価したい。	3	3
	国語科の授業づくり	説明文の授業づくりの在り方を学ぶ	3	3		4	3		3	3
生徒指導力	学年ルールの徹底	①全員が登録し入室にあきつをする。 ②全員がチャイム前に入室する。 ③忘れ物をすることをなく。	2	2	子ども自身がどれだけ出来ないかを気付かせる為に、各自評価することの大切さを学年だ。教師基準ではなく、子ども達自身のルールを守らうとする態度を育むことが2学期の課題である。 他者との関わりを深める上で、さらに活用していくことで、自分・他者のよきにつながると考える。	3	3	学年ルールの徹底については、学級の課題改善のために、朝のあきつ指導を強化する様子が見られた。学級独自で課題を改善しようとする姿勢は素晴らしいと思う。 「構造的エンカウンターグループ」では、自分のよきを見つめなおす活動を仕組むことで、セルフエスティムの向上を目指した。しかし、気になる児童については、十分な成果が得られないということだったので、2学期も継続的な指導が必要である。	3	3
	生徒指導力	子供同士の人間関係づくり	「構造的グループエンカウンター」を通して、セルフエスティムの向上	3	3		3	3	3	3
使命の自覚	学年研修会の充実	定期的に学年子どもを身をつめる会を設定したり、学力向上P D C Aサイクルを活用したりして、学年で成果を上げて、教育活動を進めていく。	3	3	学年会で言う内容を事前に確認し、学年で子どもたちの様子や授業について、大小問わず「進・進・進」することができた。親身になって話を聞いてくれて、大変が難しかった。	3	3	学力向上P D C Aサイクルを踏まえて、国語科の算数科の課題改善の取組や、学年ルールの徹底の取組を進めることができた。学年指導体制という意識をしっかりと取り組んでいる。 自分の担当する教科の提案も計画的に提案することができていた。提案する内容を単元を意識していたり、学習内容の深い理解に基づいたものになっている。	3	4
	使命の自覚	教科担当の導入	自分の担当する教科の「学習資料（原書、ノート）」と「見本のノート」を学年に提案する。	3	3	提案をもとに、計画的に教科研究をする中でノート詳細、発問を含めて学年の先生方に提案することができた。	3	3		3
家庭・関係機	家庭との連携	保護者との信頼関係づくり	3	3	子どもの成長について内容を通信で紹介できた。2学期は、学習内容についても紹介でき、家庭学習を促進していきたい。	3	3	毎週、子どもの姿を家庭に伝える通信を発行していること、学級のトラブルにも迅速に対応し、保護者へ丁寧な連絡を行っていることから、保護者の信頼は厚い。 「命」をテーマにした新たな単元づくりでも、積極的にアイデアを出したり、自分から「やります」と言ったりと、主体的に関わろうという姿勢が見られた。	3	3
	家庭・関係機	地域との連携	定期的な学習の時間の単元づくり	3	3		3		3	4

【資料32 若年教員育成評価表】



各学年主任が、学年メンタリングの実践を報告した後に、校長と教頭がそれぞれ指導・助言を行う。

「学習指導力」に係ることで、受けた指導・助言は以下の通りである。

<校長>

メンターとして、教材研究の仕方や発問や板書といった授業づくりについてメンティに教えることは大切だが、それだけで終わってはいけない。メンティが得意分野を生かして主として活躍したり、メンターに教えたりするなどの場（リバース・メンター）をつくることも意識してほしい。また、メンティとコンシリエリのコーディネートをするなど、学年としてメンティに関わる体制づくりを構築することも重要である。

<教頭>

学力向上に向けて、東風スタイルの授業づくり（1学期は「めあて」と「まとめ」を自力で作成することに重点）を学年で揃えながら取り組んでほしい。また、厳しい子ども達には、「書きなさい」というだけでは難しい。書かせるためには、モデルを提示する等、考えるための足がかりをつくる必要がある。そして書かせた後は、ぜひ、ノート指導を行い、子どものがんばりに対して評価してほしい。

② 学年主任研修会通信による取組の紹介

1学期に「学習指導力」について、報告した実践は、資料33の通りである。このように学年の取組を紹介することのねらいは、学年メンタリングの実践モデルを提示することで、実践のアイデアを共有すること、そして学校全体で若年教員育成ロードマップの取組を推進していこうという雰囲気づくりをすることにある。

③ 単元を貫く「問い」を考える  
子ども達の初読の感想から「問い」をつくることはありますが、単元を貫くような深い「問い」が生まれることは難しいので、教師自身が深い「問い」をあらかじめもっておく必要があります。

④ 単元の学習過程に書かれている

**ステップアップ** No. 5 学年主任研修会

国語科の授業づくり ～説明的な文章の場合～  
国語科の授業づくりは、次の5つのステップを踏まえて行います。

- ① 「学習指導要領解説 国語編」を読む
- ② 「説明文の10の観点」(白石範孝氏)をもとに、教科書をもとに教材研究をする
- ③ 単元を貫く「問い」を考える
- ④ 単元の活動構成を考える
- ⑤ 一単位時間の活動構成を考える

① 「学習指導要領解説 国語編」を読む

② 「説明文の10の観点」(白石範孝氏)をもとに、教科書をもとに教材研究をする

③ 単元を貫く「問い」を考える

④ 単元の活動構成を考える

⑤ 一単位時間の活動構成を考える

※ ②のところが、説明文の学習内容となります。

② 「説明文の10の観点」(白石範孝氏)をもとに、教科書をもとに教材研究をする

① 題名 題名から題材や話題などをつかむ。	③ 三部構成 作品を「序論・本論・結論」に分ける。
② 形式段落 いくつかの形式段落に分かれているか。	④ 問いと答え 問いはいくつあるか、どこにあるか、それに対する答えはなにか。
③ 意味段落 いくつかの意味段落に分かれているか。	⑤ 文章構成図 形式段落の関係、つながりを表した図
④ 形式段落の主旨 それぞれの形式段落が何について書かれているか。	⑥ 事例(具体と抽象) 具体(実例・観察・調査・事例など)と抽象的なものは何か。
⑤ 要点 形式段落ごとに大切な一文を抜き出し、まとめる。	⑦ 要旨(主張) 筆者の主張をとらえる。

高学年の説明文指導では、要点をもとに文章構成図を考え、要旨をとらえることができるようになること、筆者の論理を理解することが主な流れになります。教材研究をする際には、先入観を無くすために、朱書きに教科書を読まずに、児童用教科書を用いることが大切です。

**ステップアップ** No. 6 学年主任研修会

国語科の授業づくり ～説明文「時計の時間と心の時間」～  
国語科の授業づくりは、次の5つのステップを踏まえて行います。(前号で掲載)

- ① 「学習指導要領解説 国語編」を読む
- ② 「説明文の10の観点」(白石範孝氏)をもとに、教材研究をする
- ③ 単元を貫く「問い」を考える
- ④ 単元の活動構成を考える
- ⑤ 一単位時間の活動構成を考える

実際に、このステップで平原先生に授業づくりを行っていただきました。平原先生が実際にされたことの一部を紹介します。

② 「説明文の10の観点」をもとに、教材研究

右側のノートは、平原先生が教材研究されたノートの一部です。平原先生は、教材文『時計の時間と心の時間』を「説明文の10の観点」で自分なりに解釈して授業の下準備を整えていました。実際に教材解釈をすることによって、①初読の感想書き②内容の読み取り③表現のくふうの読み取りといった読解過程の流れで書けるのではなく、高学年の重点目標である、全体の文章構成の理解に重点を置いた授業づくりをしようという目標を設定していました。また、要約でも自分で書き、「この内容だったら、①初学で要約できそうです」と、全学年の課題である条件作文の内容も含めて、検討することができていました。

③ 単元を貫く「問い」を考える

「『心の時間』とはどんな時間のことですか？」(単元を貫く「問い」)と聞き、「なぜ、時計の時間」のことを題名に加えたのでしょうか？」(補助発問)をすることで、子ども達は、学習内容と筆者の論の述べ方の両方について、読み取りたいと子どもは感じました。なぜかということ、と自分の教材解釈を説明されました。しっかりと教材研究に裏打ちされた平原先生の説明は、とてもわかりやすく納得させることができました。

⑤ 一単位時間の活動構成を考える

各段落の要点を考える学習を初任者の先生に授業公開されました。子どもの考えのすれや、つまづきを大切にしながら素直らしい授業でした。学習後は、すぐに本時の感想と授業を自分で分析して、次時へ生かそうという姿勢がありました。

今回の国語科の授業づくりを通して、「難しかったけど、楽しく授業を進めていくことができました。」という感想を述べてくれました。今回の取組をこれからの授業づくりにも生かしてほしいと思います。

【資料33 国語科の授業実践前の取組→授業実践】

【第6学年の2学期の実践】

(1) Plan (長期PDCAサイクル) …目標の修正

7月下旬、若年教員育成ロードマップの修正を行った。ねらいは、1学期の実践の成果と課題を振り返り、教師の力量と子どもの実態に即したものにすることが必要であるからである。そのために、1学期と同様に、同学年の若年教員に対してコーチングを行った。

コーチングを活用した若年教員育成ロードマップの修正(「学習指導力」について)(資料34)

コーチングの内容 (CO…学年主任メンター CR…若年教員メンティ)	
G	CO 「2学期に国語科の授業づくりで身に付けたいことは、何ですか。」
	CR 「1学期は説明文を10の観点で教材分析したので、2学期も予定通り、物語文を教材分析して授業を行いたいと思っています」
CO	「物語文の授業を通して、子どもにどのような力をつけたいと考えていますか。」
	CR 「教材のねらいに加えて、校内研の重点目標である他者と比較して、自分の考えを発表することができる力をつけたいです。」
R	CO 「なるほど。そのために、1学期の課題も踏まえて、どのような取組をしていきたいと考えていますか。」
	CR 「1学期と同様に、物語文を10の観点で教材分析するとともに、今度は、もっと深く教材研究を行い、単元構成を意識した楽しい授業づくりを行っていききたいと考えています。」
O	CO 「物語文で授業実践を行うまでに、日常の授業づくりから重点を置いて実践したいことはありますか。」
	CR 「日々の授業提案においても、発問計画と板書計画を考えたノート提案をしていきたいです。」
W	CO 「2学期の実践に向けての意気込みはどうですか。」
	CR 「2学期は、自分から計画的に授業実践の提案を行っていききたいです。」

【資料34 コーチングした内容】

このような話し合いをもとに、以下の資料35の若年教員育成ロードマップを修正した。

糸島市立東風小学校 若年教員育成ロードマップ (2019年4月～2020年3月) 【6年】	
月	4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3
PDCAサイクル	P D C A P D C A P D C A
学習指導力	東風スタイルの授業づくり 重点目標① めあての作成(2分) 70% ② まとめの作成(3分5行以上) 70% → 目標① めあての作成(2分) 80% ② まとめの作成(3分5行以上) 80% 重点目標③ 考えの自力作成率が80% ④ 自他の考えと比べた発言が80% 子どもの発言時間を8分確保
	全国学力・学習状況調査の分析 自校採点 国語科…条件付きの作文を書く 結果分析 国語科…課題用語を使い、協働立てて自分の考えをかく。
	国語科の授業づくり(教材研究の進め方、ノート指導、発問や指示の仕方) 指導 授業実践(国語文) 指導 授業実践(物語文) 教材研究 「筆者の意図をたどる、自分の考えを発表しよう」 教材研究 「自分の感じたことを、朗読で表現しよう」 板書や発問 子どもの反応 板書や発問 子どもの反応
学級経営・生徒指導力	学年ルールの徹底 学年ルールについて ①あいさつ②チャイム③忘れ物 4学期 5学期 6学期 7学期 8学期 9学期 10学期 11学期 12学期 1学期 2学期 3学期 子供同士の人間関係づくり
	指導 構成的グループ エンカウンターでの取組(SGE) 実践 「自分のよきを見つめる」 考察 修正 指導 社会的と情動的学習の進め方(SEL-ESS) 実践 「他者理解」「他者の感情理解」 考察 修正
	同学年との協働 学年研修会の充実 学力向上の取組 学力向上の取組 自ら課題を見つけ、取組を提案する ステージに応じた自己研鑽への意欲
使命の自覚・協働性	教科担当制の導入 担当教科の提案の仕方(学芸) 担当教科の提案の充実 重点教科…国語 ※担当教科…国語、特活、体育、(総合) 1学期の内容+主発問を提案
	保護者や地域との信頼関係づくり 保護者との信頼関係づくり 家庭とのつながり 全体…学級通信(週に1回) 個別…アクション3の実施(連絡帳や電話連絡、家庭訪問)
	外部機関との連携 総合的な学習の時間の単元づくり 学年で協同して授業実践を行う 一単位時間の授業づくりを学び、自らも提案する
家庭・関係機関との連携	外部機関との連携

【資料35 修正した若年教員育成ロードマップ】

1学期において、メンティはメンターやコンシリエリからの指導・助言を受けてから、教材研究をしたり、授業提案をしたりするといった受け身の学びが多かった。しかし2学期においては、国語科に限らず他教科においても、実践までの見通しをもって、教材研究や授業提案するなど積極的に1学期の学びを生かそうという姿勢(資料34で述べた内容を有言実行)が見られたことにメンティの成長を感じた。



(2) Do…日常の実践

10月下旬～11月中旬にかけて、国語科「自分の感じたことを、朗読で表現しよう(物語文)」の学習で、「学習指導力」の実践を行った(資料35)。ねらいは、メンティが1学期の説明文の実践を踏まえて、計画的に自分の教材解釈に基づいた授業づくりを行うことである。そのために、①GROWプロセスシートを活用して授業実践までの見通しを明確にし、②学年メンタリングのもと、授業実践を行うといった流れで実践の積み上げを図った。

① コーチングを活用したGROWプロセスシートの作成

2学期は、メンターがメンティをコーチングしながら、メンティがGROWプロセスシートを作成した(資料36)。そしてこのシートをもとに、以下のような予定を設定(資料37)した。

<GROWプロセスシート>

作成者: 平原 植太郎

③その目標をたてた意図・目的は?  
「読むこと」学習の形成目標から  
全国学力テストの課題から  
→ 学習指導要領の観点から

④すでに達成できていることは?  
登場人物の相互関係が深まり  
登場人物の動きの変化  
→ 叙述に想像力を加え、  
主人公に対する「読解」80%  
→ 全国学力テスト「読解」60%  
効果的だったことは?  
「ガイド」を活用して、  
→ 叙述に登場人物の動きを  
捉えやすかった。  
→ 「登場人物」の登場の  
順序  
改善すべきことは?  
→ 登場人物の動きをつくる  
→ 叙述の質の向上  
→ 質・量・長さの調整  
→ 叙述の順序

⑤目標と現実のギャップは何か?  
→ 登場人物の動き  
→ 叙述の順序  
→ 登場人物の登場の順序  
→ 叙述の質の向上  
→ 質・量・長さの調整  
→ 叙述の順序

⑥使える資源は?  
→ 登場人物の動き  
→ 叙述の順序  
→ 登場人物の登場の順序  
→ 叙述の質の向上  
→ 質・量・長さの調整  
→ 叙述の順序

⑦ギャップを埋めるための選択肢は?  
→ 10の観点で読解  
→ 読解の順序  
→ 登場人物の登場の順序  
→ 叙述の質の向上  
→ 質・量・長さの調整  
→ 叙述の順序

⑧やる気や決意したのは?  
→ 「10の観点」  
→ 読解の順序  
→ 登場人物の登場の順序  
→ 叙述の質の向上  
→ 質・量・長さの調整  
→ 叙述の順序

⑨目標が達成できた状態は?  
→ 教師から読み取った  
→ 登場人物の動き  
→ 叙述の順序  
→ 登場人物の登場の順序  
→ 叙述の質の向上  
→ 質・量・長さの調整  
→ 叙述の順序

⑩ やってみたい結果

セルフ・フィードバック

GROW プロセスシートの作成過程

1 GOAL の明確化

①学習指導要領解説の内容と学級の子どもの実態をもとに設定

②授業場面の子ども姿を具体化

③全国学力テストの課題と校内研究との関連から

2 REALITY の把握

④子どもの実態とこれまでの指導

⑤これまでの授業実践の課題

3 RESOURCE の発見

⑥参考になる書籍や頼れる先輩

4 OPUTIONS の創造

⑦「⑥」をさらに具体化

5 WILL の確認

⑧実践する内容の決定

⑨実践までの流れを具体化

⑩実践後に振り返り

【資料36 GROWプロセスシートとその作成過程】

② 学年内通信による情報の共有と見通しの可視化(11月の中期PDCAサイクル)

国語科の授業実践に向けたPDCAサイクル	
<b>Plan (計画)</b>	
・メンティの取組	
11/6 (水)	GROWプロセスシートの提案
7~20	教材研究
11月下旬	授業づくり
12月上旬	国語科専門の主任教諭に授業実践内容の提案
<b>Do (実行)</b>	
11/13 (水)	教材研究(物語文の10の観点の①~⑤)
20	教材研究(物語文の10の観点の⑥~⑩)
27	授業内容の提案
①児童ノート提案…教師の疑問、予想される反応、板書を記入	
②板書資料	
③板書計画	
12/2 (月)	授業実践スタート
※随時相談・提案	
<b>Check (評価)</b>	
11/13, 20	教材研究ノートの提案内容について
※ 11/27以降の実践は、12月に評価	
<b>Action (改善)</b>	
11/20	これまでの学年メンタリングを受けて、修正した内容を27日からの授業内容の提案に生かす

【資料37 日常の実践の見通し】

ア Plan (計画)

11月6日にメンティがGROWプロセスシートをもとに授業実践に向けた計画を提案する。このPDCAサイクルの実践計画(資料37)は、事前にメンティがメンターに提案した。

イ Do (実行)

11月の第3週～第4週まで、メンティが毎週計画に従って提案を行う。

ウ Check (評価)

各提案後に、メンターとコンシリエリの指導・助言をもとに、提案を振り返る。

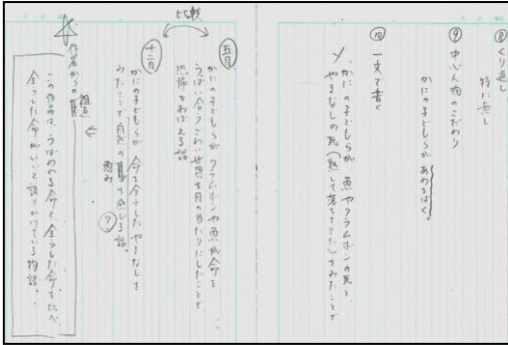
エ Action (改善)

Checkで明らかになったことを踏まえて、次週の提案へとつなげる。

GROWプロセスシートを作成することで、ねらいや実践までの道筋が明確になった。この取組が、メンティが、自ら実践計画を提案するなどの主体的に授業実践に取り組む姿勢につながっていた。

③ 学年メンタリングの実践（11月上旬～12月上旬までの実践）

ア メンティによる国語科の授業づくり（教材研究）



資料 38 は、メンティが教材文「やまなし」を「物語文の 10 の観点」をもとに、教材研究したノートの一部である。

教材研究を進めていく中で、授業づくりについて、以下の 2 点についてメンターに相談があった。

- ① 子どもが楽しく学ぶ授業
- ② 筆者の伝えたいことを 1 文で書く活動

【資料 38 教材研究ノート】

相談の流れは、以下の通り（資料 39）である。

メンティ：教材の内容が難しいので、場面の状況を理解させるのに表に整理して考えさせようと思いますが、子どもが楽しく学ぶ授業になるかが不安です。どうしたらいいと思いますか。

メンター：確かに、国語の読解を苦手とする子どもにとっては難しいかもしれません。その子どもたちが学習に参加し、楽しく学ぶためには、場面の状況を絵にかいて捉えさせてもいいと思います。そして、絵の描き方にずれが出たところを話し合うようにすれば、叙述に立ちかえることもできるし、曖昧なところをはっきりするだけでも読むことの楽しさを感じることができると思います。

メンティ：ありがとうございます。もう 1 つは、筆者の伝えたいことを 1 文で書く活動を取り入れたいと思いますが、どう思いますか。

メンター：面白い活動だと思いますが、筆者の伝えたいことを書くには、① 5 月と 12 月のそれぞれの場面で筆者が伝えたいことを考える② 5 月と 12 月を比較してつながりを考えるといった細かなステップを踏まないと難しいと思います。

メンティ：ありがとうございます。国語が苦手な子ども達の立場に立って、もう一度展開を検討してみます。

メンター：授業づくりで悩んでいることについては、今度、コンシリエリと国語科を専門としている主幹教諭に提案する際にも聞いてみましょう。

【資料 39 相談の流れ】

学年メンタリングを行う機会に、主幹教諭にも入ってもらい、指導・助言を受けた。



- ① 子どもが楽しく学ぶ授業
  - ・「情報の取り出し」→「解釈」→「熟考・評価」のプロセスを取り入れた授業をする。
  - ・叙述を根拠に自分なりの解釈をして、考えを交流する学びの積み上げを大切にする。
- ② 筆者の伝えたいことを 1 文で書く活動
  - ・宮沢賢治の生涯を記した「イーハトーブ」から賢治の人柄や生き方を捉え、その内容とつなげて考えさせることが重要である。

【資料 40 主幹教諭から指導・助言を受ける様子 と 指導・助言の内容】

学年メンタリングと主幹教諭の指導・助言を受けて、メンティは、以下のような単元構成を仕組んだ（資料 41）。

メンティの考える大まかな流れ

- ① 題名読みから学習課題の設定  
主な活動：なぜ「やまなし」という題名にしたのかについて考える。
- ② 「イーハトーブ」を読み、賢治の生き方や考え方を把握  
主な活動：賢治の生き方や考え方がわかる叙述にサイドラインを引き、賢治の人物像を考える。
- ③ 五月の場面と十二月の場面の読み取り  
主な活動：(i) 場面を絵に表す (ii) 場面の与える印象を話し合う (iii) 賢治のしかけ（色や形等）を読み取る
- ④ 五月と十二月の場面を比較し、筆者の伝えたいことを一文で表現  
主な活動：「イーハトーブ」の賢治の生き方や考え方とつなげて、伝えたいことを考える。

【資料 41 メンティの考える単元構成】

## イ メンティによる国語科の授業づくり（授業実践）



筆者は、五月の場面では「奪われるいのち」を、そして十二月の場面では「与えるいのち」を描いているから、「いのちはつながっている」ことを伝えたかったと思う。



### 【資料 42 学習中の交流の様子】

本時は、五月と十二月の場面を比較し、筆者が伝えたいことを一文で表現することをねらいとした。

学習展開は、以下の通りである。

- ①五月と十二月の場面についてこれまで読み取ったことを比較しながら、整理する。
- ②五月と十二月の場面を比較し、それぞれの場面で筆者が伝えたいことを考える。
- ③五月と十二月の場面を関連づけて、筆者が伝えたいことを一文で表現する。

### 授業実践後の学年メンタリング（資料 43）

メンター：授業を終えて、どのように感じましたか。

メンティ：目標にしていた「筆者の伝えたいこと」については、100%の子どもが自分なりの根拠をもって書くことができたのでよかった。

メンター：なぜ、全員が書けたと思いますか。

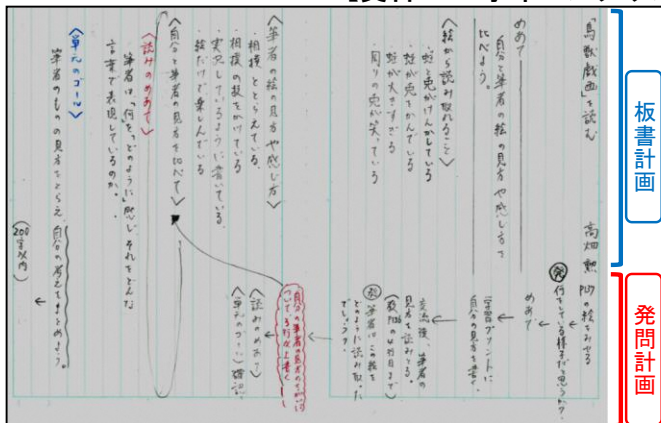
メンティ：前時までにみんなで作成した五月の場面と十二月の場面の絵を比較し、共通点と相違点を明らかにしながら、二つの場面のつながりを考えさせる活動を仕組んだからだと思います。改めて単元を意識した授業づくりを行うことの重要性を感じました。

メンター：確かに、先生が話す通り、子どもの思考の流れを踏まえた授業展開になっていたのだから、子どもがいきいきと自分の考えを発表していましたね。特に、賢い子ども達だけが活躍する授業にならず、全員が参加できる授業になっていたのがよかったと思います。この下地をつくったのは、先生の日頃の授業づくり（資料 44）があつてのことです。

メンティ：ただ、課題もありました。それは、賛成や反対などの立場を明らかにして自分の考えを発表することができた子どもは、40%程度に留まってしまったことです。子どもたちの考えにずれが生じているところを取り上げ、そのことについて考えを出し合う場を設定する必要だったと思います。

メンター：よく分析できていますね。課題に感じたことを3学期の実践へとつなげましょう。

### 【資料 43 学年メンタリングの会話の内容】



学年メンタリングの会話の内容に書いていたように、メンティは、授業実践の単元に限らず普段の授業づくりから、板書と発問を意識した提案を行っている（資料 44）。

これは、1学期末に行ったコーチングで発言した内容を実践しているものである。この日常の実践の積み上げが、本時の授業実践にもつながっている。

### 【資料 44 日常の授業づくり】



(3) Check・・・評価

12月下旬、国語科「自分の感じたことを、朗読で表現しよう（物語文）」の実践を振り返り3つの点について評価を行った。ねらいは、それぞれの立場から学年メンタリングの取組を見直し、3学期の実践へとつなぐことである。そのために、1学期のメンターが中心となって「教える」段階から、2学期のメンティが中心となって「やってみる」段階へとステップアップした取組を行った。

若年教員育成評価表を活用した学年メンタリングの振り返り

目標項目	達成標準	メンティ記入				メンター記入				コンソリエリ記入			
		9月	10月	11月	12月	9月	10月	11月	12月	9月	10月	11月	12月
国語科の授業づくり 物語文の授業づくりの振り返りを行う	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける物語文の「読み」力を明らかにする。	3	3	3	4	3	3	4	4	3	3	4	4
	物語文の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	3	3	4	4	3	3	4	4
	教材研究をもとに、単元計画1単元期間の学習指導要領をもとに授業実践を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	4	4

【資料 45 若年教員育成評価表】

(4) Action・・・改善

12月下旬、学年主任研修会において、各学年が作成した若年教員育成評価表をもとに、2学期の実践を振り返った。ねらいは、2学期の実践の成果と課題を明らかにすることで、3学期の実践へとつなぐことである。そのために、事前に学年主任研修会運営委員会を開き、主幹教諭と学力向上コーディネーターとともに、3学期の実践に向けて協議を行った。

学年主任研修会運営委員会の開催

協議した内容は、1学期と同様の「学期末テスト」の結果について（学力向上コーディネーターより）と「若年教員育成ロードマップの修正案」（統括学年主任）についてである。

学年主任研修会の開催

① 若年教員育成評価表の報告による情報の共有

各学年主任が作成した若年教員育成評価表（資料 46）をもとに、2学期に取り組んだ実践について報告を行った。

令和元年度 若年教員育成評価表													
2 学期	4・・・設定した目標を高度に達成できた 3・・・設定した目標を概ね達成できた 2・・・設定した目標を達成できていない 1・・・観望等の見直しが必要												【6年】
	メンティ				メンター				コンソリエリ				
目標項目	達成標準	9月	10月	11月	12月	9月	10月	11月	12月	9月	10月	11月	12月
児童スタイルの授業の実践	児童スタイルの授業を週に4回以上、複数教科で実施する	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
児童スタイルの授業の実践	児童の自力学習時間を90分を超える	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	目標の考えを述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
全学年・学年主任協議会の所定事項の協議実施	100%以上の子どもが協議事項を明らかにして意見をかく	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける物語文の「読み」力を明らかにする。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	物語文の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	教材研究をもとに、単元計画1単元期間の学習指導要領をもとに授業実践を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	4	4
学年主任協議会の実施	協議事項を明らかにし、意見を述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	児童スタイルの授業を週に4回以上、複数教科で実施する	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
児童スタイルの授業の実践	児童の自力学習時間を90分を超える	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	目標の考えを述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
全学年・学年主任協議会の所定事項の協議実施	100%以上の子どもが協議事項を明らかにして意見をかく	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける物語文の「読み」力を明らかにする。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	物語文の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	教材研究をもとに、単元計画1単元期間の学習指導要領をもとに授業実践を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	4	4
学年主任協議会の実施	協議事項を明らかにし、意見を述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	児童スタイルの授業を週に4回以上、複数教科で実施する	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
児童スタイルの授業の実践	児童の自力学習時間を90分を超える	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	目標の考えを述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
全学年・学年主任協議会の所定事項の協議実施	100%以上の子どもが協議事項を明らかにして意見をかく	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける物語文の「読み」力を明らかにする。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	物語文の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	教材研究をもとに、単元計画1単元期間の学習指導要領をもとに授業実践を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	4	4
学年主任協議会の実施	協議事項を明らかにし、意見を述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	児童スタイルの授業を週に4回以上、複数教科で実施する	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
児童スタイルの授業の実践	児童の自力学習時間を90分を超える	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	目標の考えを述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
全学年・学年主任協議会の所定事項の協議実施	100%以上の子どもが協議事項を明らかにして意見をかく	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける物語文の「読み」力を明らかにする。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	物語文の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	教材研究をもとに、単元計画1単元期間の学習指導要領をもとに授業実践を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	4	4
学年主任協議会の実施	協議事項を明らかにし、意見を述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	児童スタイルの授業を週に4回以上、複数教科で実施する	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
児童スタイルの授業の実践	児童の自力学習時間を90分を超える	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	目標の考えを述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
全学年・学年主任協議会の所定事項の協議実施	100%以上の子どもが協議事項を明らかにして意見をかく	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける物語文の「読み」力を明らかにする。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	物語文の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	教材研究をもとに、単元計画1単元期間の学習指導要領をもとに授業実践を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	4	4
学年主任協議会の実施	協議事項を明らかにし、意見を述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	児童スタイルの授業を週に4回以上、複数教科で実施する	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
児童スタイルの授業の実践	児童の自力学習時間を90分を超える	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	目標の考えを述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
全学年・学年主任協議会の所定事項の協議実施	100%以上の子どもが協議事項を明らかにして意見をかく	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける物語文の「読み」力を明らかにする。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	物語文の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	教材研究をもとに、単元計画1単元期間の学習指導要領をもとに授業実践を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	4	4
学年主任協議会の実施	協議事項を明らかにし、意見を述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	児童スタイルの授業を週に4回以上、複数教科で実施する	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
児童スタイルの授業の実践	児童の自力学習時間を90分を超える	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	目標の考えを述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
全学年・学年主任協議会の所定事項の協議実施	100%以上の子どもが協議事項を明らかにして意見をかく	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける物語文の「読み」力を明らかにする。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	物語文の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
国語科の授業づくり	教材研究をもとに、単元計画1単元期間の学習指導要領をもとに授業実践を行う。	3	3	3	4	3	3	3	4	3	4	4	4
学年主任協議会の実施	協議事項を明らかにし、意見を述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	児童スタイルの授業を週に4回以上、複数教科で実施する	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4
児童スタイルの授業の実践	児童の自力学習時間を90分を超える	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
児童スタイルの授業の実践	目標の考えを述べて発表する子どもが90分を超える子どもの割合が概ね50%以上となる	2	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	4
全学年・学年主任協議会の所定事項の協議実施	100%以上の子どもが協議事項を明らかにして意見をかく	3	3	3	4	3	3	3	4	3	3	4	4

【資料 46 若年教員育成評価表】

各学年主任が、学年メンタリングの実践を報告した後に、校長と教頭がそれぞれ指導・助言を行う。

「学習指導力」に関係することで、受けた指導・助言は以下の通りである。

＜校長＞  
どの学年も学年で統一した実践が進んでいるところがよいし、学校全体として、組織的に動いていることが学力の向上にもつながっている。これからはメンターとして、若い先生が成長を実感できるような場づくりや取組を行ってほしい。そのためにもリバーズメンターの実践を進めていくことが必要である。

＜教頭＞  
東風スタイルの定着がずいぶん図れている。ただ、メンティが授業を通して教えるべき内容をきちんと理解しているかを確認してほしい。そういう日常の授業に対する話が気軽にできるように、メンティが話しやすい学年の雰囲気づくりをこれからも心がけてもらいたい。

## ② 学年主任研修会通信による取組の紹介

ステップアップ No. 9 学年主任研修会

第6学年の学年メンタリングの実践 ～ 学習指導力編 ～

1学期の実践 2学期の実践

P 計画  
メンターが計画を立てる 学年メンタリング  
D 実践  
授業の準備  
C 評価  
授業の実践  
授業内容の振り返り  
実践後の協議  
A 日常の授業改善

学年内連携で確認  
授業づくりの仕方を習得  
実践材料 → 説明文  
・教科研究を生かす  
・テーマ・基本的な授業づくり  
・学年メンタリング

メンティが計画を立てる  
GROWプロセスの作成  
実践材料 → 物産文  
・教科研究を自分なりにやってみる  
・テーマ・楽しく学べる授業づくり  
・学年メンタリング・高山標準

授業づくり実践を評価  
事実 + 価値付け → 達成感  
次の実践へ生かす  
・日常の学習や2学期の実践へつなぐことを心がける。

次の実践へ生かす  
・日常の学習や2学期の実践へつなぐことを心がける。

若年教員育成ロードマップをもとに、計画的・継続的に実践の積み上げを行い、行った実践を若年教員育成評価面表で価値付けをして次の実践へとつなぐようにしてください。大切にお願いします。

【変化のある繰り返し】です  
若年教員育成ロードマップ・若年教員育成評価面表に掲げた目標が達成できるように、段階的な指導の積み上げをお願いします。

【資料 47 学年主任研修会通信】

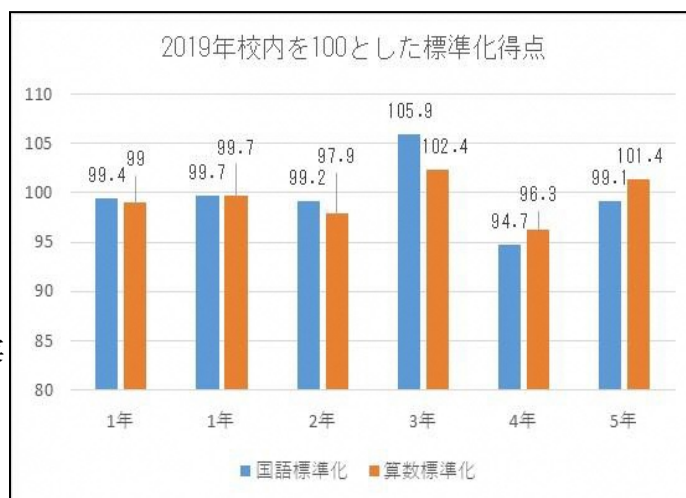
「学習指導力」について報告した実践は、1学期と2学期の学年メンタリングの取組を比較したものである（資料 47）。1学期は、メンターが中心となって、PDCAサイクルの回し方や教材研究の仕方など、さまざまなことをメンティに教えるといった、いわば習得する場面が多かった。一方の2学期は、1学期に学んだことを生かして、自分でPDCAサイクルを回したり、教材研究をしたりするなど、活用する場面を意図的に仕組んだ。

このように学年メンタリングの実践を比較して紹介することで、年間を通じて同じ指導をくり返すのではなく、年間の見通しをもって段階的な指導を心がけてほしいことを伝えた。

## 8 全体考察

### (1) 学年間の学級間差について

資料 48 の標準学力テストの結果を見ると、4つの学年において若年教員の学級と他の学級との学級間差が5点以内に縮まっている。これは若年教員がコーチングによって自らの目標を設定し、その目標達成に向けて、1年間を通じて、PDCA サイクルとりながら実践の積み上げを行ったことと、それを学年組織が学年メンタリングの実践という形で継続的に指導・支援を行ったことが有効に働いたと考える。



【資料 48 若年教員の標準化得点】



## (2) 若年教員育成評価表の変容から

4…設定した目標を高度に達成できた 3…設定した目標を概ね達成できた 2…設定した目標を達成できていない 1…規準等の見直しが必要

目標項目		達成規準	運営計画																	
			メンティ記入				メンター記入				コンシリエリ記入									
			6月	7月	9月	10月	11月	12月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
学級指導力	全国学力・学習状況調査の分析	国語科 70%以上の子どもが条件にあった文をかく	3	3	3	3	3	4	3	3	3	3	4	4	3	3	3	3	4	4
	国語科の授業づくり 説明文の授業づくりの在り方を学ぶ	学習指導要領解説をもとに、6年生で身に付ける説明文(物語文)の『読む』力を明らかにする。	3	3	3	3	4	3	3	3	3	4	4	3	3	3	3	4	4	
		説明文(物語文)の読みの「10の観点」をもとに、教材研究を行う。	3	3	3	4	4	3	3	3	4	4	3	3	3	3	4	4		
		教材研究をもとに、単元計画や1単位時間の学習指導過程をくふうして授業実践を行う。	3	3	3	3	4	3	3	4	3	4	3	3	4	4	4	4		

### 【資料 49 若年教員育成評価表(第6学年)】

資料49の第6学年の6月と12月を比べると、どの項目も評価があがっていることがわかる。このことから、PDCA サイクルを意識しながら、計画的・継続的に行った学年メンタリングの実践が有効に働いたことがわかる。

達成規準	メンティ記入						メンター記入						コンシリエリ記入					
	6月	7月	9月	10月	11月	12月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
算数科の授業づくり ○先生 導入において、めあてを持たせるための説明力をつけるために、時間配分と観点を考える。 ○先生 算数において、学習率を上げるための発問計画を立てる。	3	3	3	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
国語科の授業づくり 学習指導要領解説をもとに、2年生で身に付ける物語文を『読む』力を明らかにする。 教材研究をもとに、1単位時間のノート指導の仕方を正発問とつなげながら、考えて授業実践を行う。	3	3	3	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3	3	2	3	3	3
算数科の授業づくり 教材研究をもとに、1単位時間の学習を組み立て、板書計画を作ったり、教材準備をしたりする。	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
国語科の授業づくり 学習指導要領解説をもとに、4年生で身に付ける説明文の『読む』力を明らかにする。 教材研究をもとに、単元を通じたノート指導をくふうして授業実践を行う。	2	2	2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	2	2	3	3	3	3
理科の授業づくり 学習指導要領解説をもとに、5年生で身に付ける理科の目標やねらいを意識して授業を行う。 予備実験を確実にに行い、授業について学年に提案できるようにする。 教材研究をもとに、単元計画や1単位時間の学習指導過程をくふうして授業実践を行う。	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3

### 【資料 50 若年教員育成評価表(第1学年～第5学年)】

資料50の他学年の1学期と2学期を比べると、伸びが見られる学年がある一方で、低い評価が続いてしまっている学年がある。このことから、効果的な学年メンタリングの実践について共有したり、低い評価が続く学年の悩みを聴き、具体的な改善策を話し合ったりする時間を設定することが必要であったと考える。

## (3) 学年組織の取組の感想から

メンティの感想	コンシリエリの感想
<p>若年教員育成ロードマップのおかげで、一年間の実践の見通しをもって実施することができた。また、これまでの自分の授業実践から課題を見つけ、目標を明確にもち、一年後の自分のゴール像をもつことがとても大切なことだと感じた。目標の姿にたどり着くために何をすればよいのか、どんな準備が必要なのかを考えながら計画的に実施、そして新たな課題へとつなぐことができたのは、メンターやコンシリエリのおかげである。</p>	<p>コンシリエリとして、メンターが計画している若年教員育成ロードマップを円滑に進めていくことができるように協力していくこと、メンティが提案したことをいっしょに協議しながら実践し、学年で成果と課題について振り返ることで、次の課題を明確にしていこうと心がけた。またコンシリエリは、学年全体を見ながら、メンティやメンターと積極的にコミュニケーションを取る中で、相談しやすい環境づくりをすることが大切だと感じた。</p>

### 【資料 51 第6学年のメンティとコンシリエリの感想】

2人の感想から、若年教員育成ロードマップを活用しながら、目標のゴール像(若年教員の資質・能力の向上)に向けて、メンティ、メンター、コンシリエリがそれぞれの立場を自覚しながらPDCA サイクルを意識して学年メンタリングの実践を積み上げていくことができたこと

がわかる。このことから、若年教員育成ロードマップ・評価表を活用することは、若年教員を育成する上で有効に働いたと考える。

#### (4) 学校組織の取組の感想から

他学年の学年主任の感想	主幹教諭の感想
<p>若年教員育成ロードマップ・評価表を作成することで、自分も明確な見通しをもって若年教員を育成することができた。またその作成・活用することを通して、自分の実践を振り返ることにもつながっている。さらに評価をする場を設定することで自覚と責任をもって学年メンタリングに取り組むことができた。学年主任研修会での実践報告や学年主任研修会通信等の紹介で、様々なアプローチについて知れたり、相談できる場があったりしたことはよかった。</p>	<p>学年主任研修会の運営に携わることを通して、学力向上コーディネーターと統括学年主任とともに、学力向上について話し合う時間を確保することができた。若年教員育成ロードマップのPDCAサイクル化を図ったことが、本年度の学力向上につながったと考える。学年主任研修会における若年教員育成評価表の報告等を受けて、自分自身も学年の強みや弱みを把握することができた。校内研（東風スタイルの授業の日常化）に向けた具体的な指導ができるようになった。</p>

#### 【資料 52 他学年の学年主任と主幹教諭の感想】

他学年の学年主任の感想から、若年教員育成ロードマップ・評価表の作成・活用をすることは、メンティの育成のみならず、メンター自身の育成にもつながることがわかった。さらに、学年組織と学校組織をつなぐことで、若年育成を図るスキルを学んだり、学年メンタリングの実践について相談したりできていたことがわかった。また、主幹教諭の感想から、学校として組織的に若年教員を育成することに関わることを通して、本校の学力課題の改善にもつながったことがわかった。これらのことから、若年教員育成ロードマップ・評価表について学年主任研修会運営委員会で協議したり、学年主任研修会で報告・紹介を行ったりすることは、若年教員を学校全体で組織的に育成する上で有効であったと考える。

## 9 成果と課題

### (1) 研究の成果

- 学年組織において、若年教員育成ロードマップ・評価表を活用して計画的・継続的に実践を積み上げていくことは、若年教員の学習指導力の資質・能力の向上につながる。
  - ・若年教員育成ロードマップの作成・活用  
明確な目標に向かって、計画的・継続的に実践を積み上げていく上で有効
  - ・若年教員育成評価表の活用  
それぞれの立場で学年メンタリングの実践をふり返り、次の実践へとつなぐ上で有効
- 学年組織と学校組織をつなぐ学年主任研修会において、各学年のPDCAサイクルの取組や実践を報告・紹介することは、学年メンタリングの実践を継続的に改善し、学校全体で組織的に若年教員を育成することにつながる。

### (2) 今後の課題

- 各学年の取組の成果に、学年間の差がある。このことを踏まえて、学年主任研修会において、悩みを抱える学年に対してより具体的な改善策を話し合ったり、統括学年主任が個別に指導・助言を行ったりするシステムづくりの構築が必要であると考え。

#### <参考文献>

- ・福岡県教育センター（平 29）『実効性のある検証改善サイクルによる学力向上』研究紀要
- ・ジョセフ・オコナー，アンドレア・ラゲス（平 24）『コーチングのすべて』英治出版